

---

# エヴァさん家の魔皇様

閑古鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エヴァさん家の魔皇様

### 【Nコード】

N79200

### 【作者名】

閑古鳥

### 【あらすじ】

魔皇様だ！の外伝？というか日常編みたいなものです。本編だとエヴァの家の中での会話が少ないのでそのためのもの。内容はグダグダ、だらだらしたことになります。

## 1話 魔皇様 ゲームをする

「なあ、エヴァ。暇なんだけど。」

今日は休日。何の予定もない俺は暇を持て余していた。

「ふん、そんなこと私の知ったことか。」

「おいおい、冷たいな。ところでエヴァはよくゲームをしているが面白いのか？」

「なんだ？ やったことないのか？ 可哀想な奴め。」

そう言って本当に哀れなものを見るような目で見てくるエヴァ。うつわー、殴りてー、チョー殴りてー。

だが我慢だ。幼女に何を言われようとも大人の俺は我慢だ。拳を握りしめプルプルさせながらこらえる。

「あ、ああ。あまり興味がなかったものでな、今までやったことがないのだよ。」

「ふん、そうか。なら私のものを貸してやろう。」

「おお、感謝してやらんこともない。ふむ、ポケ○ンか。どんなゲームなんだ？」

「えーっとだな・・・面倒だやればわかる。ただゲームからアニメになり、世界中で売れている日本有数のゲームだ。」

「っち、使えねー幼女だ。まあいい、そこまで人気があるのなら面白いのだろう。とりあえずやるか。」

「おい、ライル！貸してやったのにその言い草はなんだ！」

「エヴァ・・・今からゲームやるんだから静かにしてもらえないか？エヴァも、もしゲームを始めようって時に自分がやられたら怒るだろう？」

「あ、ああ。すまなかった。あれ？なんかおかしくないか？」

戸惑うエヴァを放置して電源を入れる。

「ふむ、最初は3匹の中から選ぶのか・・・なあ、エヴァ。もうちょっとこう、強そうでかっこいい奴はいないのか？」

「ふん、最初は可愛いやつが多いのだ。やっていればそのうち出てくる。」

さきほどのやり取りにまだ怒りを感じているのか返答が投げやりだ。そんなことで怒るからいつまでも幼女なのだ。

「ふむ、そうか。じゃあ、しばらく我慢しよう。」

ピコピコ

「なあ、エヴァ。ライバルは何故俺の弱点属性を選ぶのだ？卑怯じゃないか。」

「そういう仕様だ。諦めろ。」

「そうか。」

ピコピコ

「なあ、エヴァ。このゲーム何が面白いんだ？」

「数いるモンスターを集めたり、努力値を考えながらレベルを上げて自分好みのモンスターにしたり、友人と対戦したりするのが主な楽しみ方だ。」

「じゃあ、なんだ？わざわざ弱いものを強く育てなければならないのか？面倒だな、はじめから最強で良いじゃないか。」

「そんなもの面白くないだろう。お前は何を言っているんだ。」

ピコピコ

「あ、エヴァが死んだ。まあ、いいか。」

「おい、なに人の名前を勝手につけている！というよりもなぜ序盤で死ぬ！？まあ良いかって酷くないか？！！」

「それは、エヴァが弱いからに決まっているだろう？」

「ちっがー！う！明らかにお前のやり方が悪いんだよ！序盤でそう簡単に死んでたら爆発的な人気にはならないから！アニメ化なんて夢のまた夢だから！」

「うるさいな。そんなことはどうでもいいのだよ。悔しかったら強くなって見せろ。」

「だからお前のやり方に問題があるんだって！決して私のせいではない！というよりもそのゲームのエヴァを大事にしてくれ！」

「わかったわかった。茶々丸の次には大事にしてやる。」

「わかれば良いんだ。だが、ゲームのことだとわかってはいるが、そう明言されると何だかムカつくな。」

そんなこんなで数時間後。

「むむ、なかなか強そうな敵が出てきたな。とりあえず、削って捕まえるか・・・」

「ほう、なかなかハマっているようだな？ところでエヴァはどうなつた？」

「ん？ああ、エヴァね。エヴァなら速攻でBOXに入っただけど？」

「おい！お前さっき大事にするって言ったじゃないか！」

「いや、だってエヴァ弱いし。」

「レベル上げたら強くなるから！進化したら使えるようになるから！」

「俺には茶々丸がいればいいのさ。おっ、もうこんな時間か。そろそろ飯だな。」

「頼む！ エヴァを前線に復帰してくれ！ 自分の名前でBOX入りは嫌だ！」

その後、茶々丸の作ったご飯を食べ、ゲームを再開した。もちろんエヴァはBOX入りのままである。

## 1話 魔皇様 ゲームをする（後書き）

なんとなく思いつきで書きました。ええ、原作の流れがなければ、私の筆力はこの程度なのです。



## 2話 魔皇様 求婚する

「茶々丸愛してる。結婚してくれ。」

「わたしも「だぁー！ー！茶々丸はやらんと言っているだろうが！」

「なんだお義母さん。まだ許してくれないのか？」

「マスター・・・」

「お義母さんじゃない！そして茶々丸お前もそんな目で見るな！というよりもお前は私の従者だろうが！」

「従者かそうでないかなんて関係ない！俺が茶々丸を愛しているその事実だけが重要なのだ！」

「ライルさん・・・」／／

「うがぁー！私は認めん、認めないからな！」

「仕方がない今日は諦めよう。」

「はぁはぁ、しかし何故茶々丸何だ。他のクラスメートも口説いていただろうが。」

「ふむ、確かに彼女たちは魅力的だな。口説いていたことも否定はしない。」

「じゃあ、そっちで良いじゃないか。私も茶々丸が取られないで済む。」

「しかしだな、彼女たちは時間が有限ではないか。愛したものを看取るのはなかなか辛いと思うのだよ。まあ、それだけという訳ではないが、やはり嫁にするなら茶々丸一択だろう。」

「まあ、たしかにそれは辛い。だが、不老なら他にもいるだろう？」  
そう言いながらエヴァは少し咳払いをして注意を引こうとする。

「ふむ、だがせっかくこちらに来たのにわざわざ魔界に帰るのはちよつとな。」

「もっと他にほら、こっちの世界にもいるだろうが。」

ちらちらとアピールしてくるエヴァ。

「だが、チャチャゼロは嫁ってタイプじゃないだろう？」

「ケケケ、確カニソウダナ。」

「だぁー！ちっがー！私だ私！なぜ無視をする！」

「エヴァ・・・自分で言ってる悲しくないか？」

「お前のせいだろうが！だいたい何が気に入らんのだ！」

「前にも答えたと思うが、俺は大人の女が好きなのだ。つまりお前と真逆だな。」

「胸か?! 胸がそんなに偉いのか?! あんなものただの脂肪の塊だろうが!」

「ふん、ないものがそう言っても負け犬の遠吠えにしか聞こえんな。」

「くそっ、私も完全体に・・・完全体になりさえすれば、ライルなど・・・」

ぷるぷると怒りに震えながら口にする。

「お前はどこの人造生物だ。というよりも成長さえすれば胸が大きくなるというような口ぶりだが茶々丸はその辺どう思う?」

「マスターの日常生活におけるデータと現在の欧州におけるデータを照合し、計算した結果現在の私よりも大くなる見込みは少ないかと・・・フツ」

「何だとー!?! 茶々丸それは本当なのか? というよりもお前今鼻で笑ったな!?! まいてやる!?!」

「ああ、マスター、いけません。こんなところでは・・・」／／

「ドウヤッテ收拾ツケルンダ?」

「知らん。投げっぱなしと言うのもたまにはありだろう?」

「ケケケ、コノ小説デ落ちタコトガアルノカヨ?」

「さあな。」

### 3話 魔皇様 すげー面白い話の話？

「あ、俺今すげー面白いこと思いついたって時ないか？」

「なんだ、いきなり？まあ、確かにあることはあるが・・・それがどうした？」

いきなりのフリについてこれていないのか反応が薄い。

「いや、特に話は膨らまないんだが。」

「なんだよそれ、じゃあ言わなくてもよかったじゃないか。」

「ふむ、確かにそうだ。仕方がない頑張って膨らませてみようじゃないか。」

「いや、無理してしなくてもいいんだぞ？」

「さて、あ、俺今すげー面白いこと思いついたって時は、俺の主観ではあるがその場の空気もしくは話の流れに相応しいものではないことが多い。」

「はあ、結局やるのか。えらい主観的な話だが、そういうこともあるだろうな。」

「それで、そういう時に流れを切ってまで言っているのか迷って、結局言い出せないのだ。そしてそのまますげー面白い話は世に出ることなく消えて行ってしまう。」

「そうか、だがすげー面白い話ならば良いじゃないか。」

「はあ、お前驚くほどにジコチューだな。」

「え？なんで？」

「いや、話の流れを切られたら今まで話してた人が不愉快になるだろうが。」

「まあ、確かにそうだが・・・それでもすげー面白い話をすればきつと許してくれるさ。」

「お前どれだけ、自信があるんだよ。所詮すげー面白い話って言ったところでそれは素人の考えたことなのだぞ？」

「じゃあ何か？お前の言う、すげー面白い話ってのは実はすげー面白い話ではなかったというわけか？」

「いやいや、すげー面白い話は確かにすげー面白いんだよ。だがそれがその場にいる人にウケるかというところでもないことがあるのだ。」

「はあ、確かに万人にウケるものはそうないからな。つまりすげー面白い話は確かにすげー面白いんだけど、聞く人によってはすげー面白い話ではないこともあるということか？」

「まあ、概ねそんなところだ。」

「それで、この話はいったいどこに向かっているんだ？」

「すげー面白い話を文面に起こしてみたらすげー面白い話ではなかったというところかな。」

### 3話 魔皇様 すげー面白い話の話? (後書き)

うっわー意味わかんねー。

と、微妙な出来を笑うことがこれの楽しみ方です。ええ、言い訳ではないですよ?

ちなみに私はすげー面白い話を思いついたと思った時は、人にしゃべらず黙っています。

だって引っ込み思案なもの



#### 4話 魔皇様とコスプレ

「古菲！約束を果たしてもらいに来たぞ！」

俺は女子寮に突入し古菲部屋の扉を開けながらいう。

「ライル、いきなり女の子の部屋にくるのは良くないアル。」

「確かにそうだが、古菲なら特に困るものもないと思ってな。」

「そこまで断言されると逆に困るものを見せたくなるアルね。」

「ふむ、例えば？」

「この下……って何やらせるアルか！危なかったアル……。もう少しで見せるところだったアルよ。」／／

古菲顔を真っ赤にしてつつこむ。

「流石バカレンジャーの一人。しかし、正直お前の下着には興味がないから安心しろ。」

「むむう、それはそれで納得いかないアル。」

「長々と女子寮にいるわけにもいかないからとりあえず移動するぞ。」

そういつて俺たちは移動を開始し、家までいく。

「はあー、ライルはこんなところに住んでたアルね。」

「まあな、さてとりあえず衣装を見せるぞ。」

部屋の扉を開けると、そこには千雨がいた。

「おせーぞ、ライル。いったいどこに・・・」

「まさか、ライルと長谷川がそんな関係だとは思わなかったアルよ。」

中に千雨がいることを確認した古菲は楽しそうに言う。

「ち、違う！私とライルはそんな関係じゃない！」／／

「まあまあ、千雨落ち着け。俺はそんな関係でも吝かではないぞ？」

「えっ？って違うだろ！否定しろよ！ややこしくなんだろうが！」

「なんだ、違うアルか、それで長谷川はいったいどうしてここにいるアルか？」

「千雨にはパソコンのことでお世話になっているのだよ。そうだな千雨？」

魔法はバレても構わないのだが、修行していることを教えると、こいつは弟子にしてくれとか言い出しそうだから秘密にしておかねば。そう思いちうたんに目配せする。

「あ、ああ、そうだ。頼まれたから無碍にできなくてな。」

どうやら伝わったようで、話を合わせてくれる。

「そうアルか。」

「ところで古はいったいどうしたんだ？」

「それは今からコスプレをさせようと思っていたのだ。ああ、勘違いするなよ？これは罰ゲームなのだから。」

「ふ、ふーんそうか。そ、それでいったいどんなものを着せるんだ？」

すごく興味がありそうなちうたん。隠すならもっとうまくしなきゃ。

「とりあえず、メイド服、ナース服、巫女服、それにOLだろ？えーっと、他には教師、体操服、もちろんブルマだけだな？それから・・・。」

俺はコスプレ衣装用のクローゼットから衣装を取り出す。

「い、いっぱいあるな。」

「ちょ、ちょっとびっくりしたアルよ。」

あまりのレパートリーの多さに引き気味な2人。

「とりあえず、最初はどれにする？」

「え、最初って一着だけじゃないアルか?!」

初耳であると、驚き目を見開く古菲。

「当然だろう? 一着だとまた今度勝負を仕掛けてこようとするだろうし、ここは徹底的にやっておくべきだ。」

「そ、そんな〜アル。」

「決められないならとりあえず、このナースからだな。」

ナース服を持たせてコスプレ用の特設脱衣所に案内する。

戻ってくると、ちうたんが興味津々な様子で衣装を眺めている。

「しかし、良く出来てるな……これ、市販ものじゃないだろ……。」

「よくわかったねちうたん。これは俺のアーティファクトを使って作った特別品なのだよ! 防水、防火、しみ、汚れ、防刃、防弾などの対策を施してあるのさ!」

「明らかに必要でないものがあると思うんだが、防弾とか必要あるのかよ……というよりもお前アーティファクトってそんな用途のためにあるわけじゃないだろうが!」

「何を言う? 必要な時に必要なものを使うことが優れたものであるための条件なのだよ。」

「・・・いや、それは何か違うだろう。」

ちうたんは顔に手を当てあきれた様子である。

そんな話をしていると、着替え終わった古菲が現れる。

「ど、どうアルか？ちょっと恥ずかしいアル。」

「ふむ、褐色の肌に純白のナース服がよく映えている。胸のあたりは少しさびしいが、腰回りになんだかエロスを感じるな。むう、今まで胸ばかり見ていたが、こうしてみると腰もなかなか・・・。」

ライルは腰回りに並々ならぬ興味を得た。ライルの属性にお尻が追加された。

「うう、辱められてるアル・・・。」

「そんなこと口に出して言うんじゃないよ！」

「ふっ、言いたいときに言いたいことをいう。その権利は誰にも奪えはしないのだよ！」

「なにカッコつけてんだよ！お前の言いたいことってのは主に変態な方面ばかりじゃねーか！」

「ん？その何がいけないんだ？」

「えっ？こいつ何言ってるの？みたいな顔してんじゃないか！間違ってるのお前だから！私じゃないから！」

「さて、古菲次はこれを・・・」

「お前、本当に話を聞かないな・・・。」

「ライル自由すぎるアルよ。」

その後古菲は2時間にわたってコスプレをさせられることとなった。

ちうたんは古菲が帰った後修行し、何着かコスプレ衣装をライルから貰って帰った。

#### 4話 魔皇様とコスプレ（後書き）

くーふえのコスプレイベントはまさかのこちらでの消化。

・・・この調子だと楓もこっちでやるかも？

ライルのアーティファクトはこのためにあるのです。間違いありません。

## 5話 魔皇様 誰ウマ？

「上手いことって言ってみたくないか？」

俺はいつものごとくエヴァに問いかける

「急にどうした？ いや、お前はいつも唐突だったな。」

「ふむ、それは仕方のないことなのだ。なぜなら前振りなんて考えられないからな！」

「それは、自慢することなのか？ それより上手いことだったか、そういうのは言ってみたいと思って言うものでもないだろう？」

「確かにそうなのだが、良いタイミングでズバツと言えたら気持ちよさそうではないか。」

俺はその瞬間のことを想像し、擬似的快感に浸る。

「まあ、確かに言えたら気持ちいいだろうな。それで、いったいどうするんだ？」

「いや、それは考えてなかった。」

「そこは考えておくべきではないのか？」

エヴァは呆れた様子でため息をついた。

「しかし、考えると言っても上手いことを言うという命題を満たす



ための前振りだろう？そんなもの考えられたら上手いことを言いた  
いなんて言わないだろうが、このバカたれ！」

「なんで私が怒られるんだ・・・しかし、そうだなそう考えるとパ  
ツと出てくるものでもないな。」

「そうだろう？どうすればこう上手いことを言えるのだろうか。」

「うゝむ、難しいな。」

2人して頭を捻るがなかなか出てこない。

そこに茶々丸がやってくる。

「ライルさん、マスターどうされたのですか？」

「ああ、茶々丸か、今どうやったら上手いことが言えるかを考えて  
いるのだ。」

「はぁ、そうですか。」

「おい、茶々丸なにか上手いことを言ってみろ！」

「エヴァ、それは無茶振りにも程があるぞ・・・。」

「そうですね・・・今朝起きてすぐに朝食の準備を始め、マスター  
を起こし、掃除・洗濯をします。するとお昼の時間になるので今度  
は昼食を作り始め、そういえば、今日は買い物に行かなければなら  
なかったのだと思いだし今夜の夕食の買い物に行きます。そして帰  
ってきて、今からまた夕食の準備をしなければなりません。」

「ん？それがどうした？」

「いや、忙しくて構ってられないってことだろう。」

そうエヴァに言うが茶々丸は首を横に振って否定する。

「いえ、ただの落ち着かない話です。」

## 5話 魔皇様 誰ウマ? (後書き)

正直ごめんなさいって感じです。

上手いこと言ってみてー！ー！。

と思って書きだしたはいいけれど、全く思いつかなかったのです。

ああ、本当にすみません。

## 6話 魔皇様 家族会議！

「これより、第1回家族会議を始める。全員席につきなさい。」

俺は厳かに会議の開始を告げる。

「まったく、こんなにかしこまってやることなのか？」

「マア、タマニハイジヤネエカ。」

「マスター、ライルさんが怒らないうちに黙って座りましょう。」

「なんで私まで……。」

皆思い思いの場所に座ったのを確認し今日の議題を発表する。

「さて、今日の議題だが……いったい誰が俺のプリンを食べたか。である。」

、俺は未だかつてないほどにキレている。あのプリンは特別、特別だったのだ！

「ふん、下らん。お前が食べたのをわすれたんじゃないのか？」

「そんなことは間違っても、それこそ天と地がひっくり返ってもありえないことなのだ。なぜなら、俺は問題のプリンを今日の夕食後に食べると決めていたからだ！」

俺は机を叩きながら怒声を上げる。その衝撃でチャチャゼロが少し浮き上がった。

「ライル、オチツケヨ。」

まさか、この人形に落ち着けと言われる日がこようとは・・・少し自己嫌悪に陥る。

「ああ、すまない。つい興奮してしまったようだ。さて、今自首すれば俺は寛大な心でもって許してやらんこともない。そう、ちよっとお仕置きをする程度だから名乗りをあげてほしい。わかったか、エヴァ？」

「おい！何故そこで私を名指しする！お前・・・まさか私を疑っているのか！」

「そんな馬鹿な。俺はただエヴァの態度が悪いから名指ししたただ。勝手な憶測で喋るのはよしてもらおうか。」

俺はとんでもないとばかりに大げさなリアクションをする。エヴァはそれが余計に気に入らないようで顔を真っ赤にして怒りをあらわにしている。

「では、まずは情報の整理だ。茶々丸、今日の俺のプリンについての情報をわかるだけ全て教えてくれ。」

「わかりました。午前6時、朝食の準備をするために冷蔵庫を開けました。その時には冷蔵庫上の扉の一番下の段の奥にプリンがあることが確認されています。午前11時30分、昼食の準備のために冷蔵庫を開けました。その時も同じ場所にあることが確認されています。午後3時、マスターのおやつを出すために冷蔵庫を開けました。その時も同様に確認されています。午後6時、夕食の準備のた

め冷蔵庫を開けました。この時すでにプリンはありませんでした。」

茶々丸は言い終えると席に座る。

「なるほど、つまりプリンは午後3時から6時の間に消えたということになるわけだ。この時間に来客はあったか？」

「この間にこの家にいたものは、ライルさん、マスター、姉さん、千雨さん、そして私です。」

「そうか、つまり今ここにいるメンバーだけ。さあ、皆以上の情報をもとに会議を始めようじゃないか。」

「つまり、その間のアリバイを証明すればいいんだな？」

「そういうことだ千雨君。」

「なんでいきなり君付けなんだよ……。そうだな、私はその間魔法球の中にいたな。ライル4時から5時の間はライルに見てもらっていたから言うまでもないよな？」

「ふむ、たしかに4時から5時の間は俺が見ていたな。だが他の時間は証明するものはない、ということか。」

「まあ、そうなるな。」

ふむ、千雨は犯行が可能ということか。

「では次、エヴァ。」

「ふん、私はずっと自分の部屋にいた、5時から6時の間はチャチャゼロがいたな。」

「なるほど。では次茶々丸。」

「私は3時から5時の間は買い物に行ってます。その証拠にレシートに時間が印刷されていますから照明は可能です。その後5時から6時の間はリビングにいました。」

つまり、5時から6時の間に犯行に及べば茶々丸にばれるな。

「では最後に、チャチャゼロ。」

「オレハ基本ウロウロシテナ4時カラ5時ノ間ニハリビングニイタハズダ。帰ッテキタ茶々丸ニアツタカラナ。ソノ後ハ御主人ノ言ウ通りダ。」

「なるほど、この時点での情報ではこの場にいる誰もが犯人の可能性が消えていないということだな。」

「おいおい、どーすんだよ。このままじゃ迷宮入りしちまうぞ?」

「はあ、無駄な時間だったな。」

「まあ、待て待て。ここで俺の行動が問題となる。俺は3時から4時までリビングにいた。その後5時まで千雨の特訓、その後は部屋にいたわけだ。そして、うちの冷蔵庫は一般的な家庭用冷蔵庫・・・。」

「ん？ってことは？」

「ケケケ、ソウイウコトカヨ。」

千雨とチャチャゼロは犯人がわかったようだ。

「さて、エヴァ、とりあえず魔法球の中にこい。」

きつと俺はこの行き場の無い怒りによって顔が恐ろしいことになっているはずだ。

「ま、待て私じゃない！私じゃないのは明らかじゃないか！」

エヴァが必死に弁明する。しかしそんなことはもはや無駄である。



「従者の責任は主人がとる。当然だろう？」

こうして、第一回家族会議は閉会した。

## 6話 魔皇様 家族会議！（後書き）

無実ではあるが責任を追及されるエヴァ、可哀想に。

今回は茶々丸に味覚をつけたことによって発生した事件、本編ではキャラの薄い茶々丸にお茶目さを求めた結果まさかこんなことになるとは・・・。

内容に関しては、これっておかしくね？っていうところがあっても無視してくださるとうれしい限りです。

## 7話 魔皇様 麻帆良の変

この広大な麻帆良学園にはさまざまなサークルが存在している。

中でも武闘サークルは多種多様を極め、その数は確認しきれないほどである。

そのため麻帆良の地には力を持つ者が多く存在し、争いごと絶えることはない。しかしながら麻帆良でもめごとを起こすと奴が現れ颯爽と解決する。彼はこの学園最強であると名高く尊敬と畏怖の感情をこめて『デスメガネ』と呼ばれている。

そう、彼の名前は高畑ⅡTⅡタカミチである。

彼がいる限りこの麻帆良での最強の座は揺るぎないものだ、そう思われていた。しかし、ある日を境に勢力図が塗り替わる。

そう、かの『デスメガネ』を呼び捨てにし、そして『デスメガネ』もその人物に対して並々ならぬ敬意を持っていることが行動の端々から窺えるのだ。

それだけであれば、身分の高いものであると考えられた。いや、そう考えたかったのかもしれない。

だが、現実は無情である。

彼女のデビュー戦は鮮烈だった。ウルティマホラのチャンピオン古菲を赤子の手を捻るかのようにいとも簡単に倒してしまったのだ。

彼女はいったい何者なのか・・麻帆良を挙げての搜索活動が開始され、そして1か月経ったある日、とうとう判明した。

名前はライルⅡハーベスト。麻帆良女子中学に通う男子中学生である。

人々は混乱する。どうみても男に見えないし、なにより女子中学に通っているというのだ。

あるものと思う。男であると思い込んでいるのだと。

あるものと思う。この資料が間違っているのだと。

あるものと思う。

男でも構わない。と

それから、ライルを取り巻く環境は変化する。

決闘を申し込まれるようになった。取材を申し込まれるようになった

た。そして交際を申し込まれるようになった。

もちろん男にだ。女からもなかったこともないが彼女たちはどこか危険な目をしていた。

ライルの機嫌は日に日に悪くなっていく。普段はそうでもないのだが、登下校中の彼の威圧感は恐ろしいものがある。

そして、ついに彼は爆発した。

いつものように勝負を挑んでくるものをなぎ倒し、取材をしようと試みるものを投げ飛ばし、交際を求めてくるものをボコボコにした。

その様子を察知した教師もやられ、さらに屈強な広域指導員も倒された。

人々は理解する。彼はもう止められない。ああ、俺たちは眠っていた獅子を起こしてしまったのだと。

しかし、しかしまだ一縷の望みがあった。そう『デスメガネ』である。

奴なら止めてくれる、いや、奴が止められなければ麻帆良は終わるのだ。

・・・そして、奴は現れた。

人々は期待する。はやく彼を止めてくれ、いつもみたいに華麗に叩きのめしてくれと。

やられっぱなしだった人々は彼の敗れる姿を期待する。

だが、奴は動かない。いつまでたっても勝負をはじめようとしないので。

なぜ？ どうして？ そんな疑問が場に広がった。

あるものがしびれを切らしとうとう『デスメガネ』に言った。早く、早く彼を倒してくださいと。

僕では彼を倒すことはできない。『デスメガネ』は困った表情で顔を振った。

ああ、もう終わってしまったのか。

この瞬間最強の座は移り変わってしまった。つまり彼を倒すことのできるものはいない。

そんなことを考えていると、『デスメガネ』は口を開く。

倒すことはできないが、止めることはできる。

そして、その言葉を残し彼に近づいていく。

まさか、まさか『デスメガネ』は自分を犠牲にして止めようとしているのではないか。

不甲斐ない、この動かない身体が非常に苛立たしかった。

『デスメガネ』の背中は大きく見える。ああ、俺は奴のようになりたい。きつとこの場にいる誰もがそう思ったに違いない。

彼は『デスメガネ』を確認すると止まった。そして『デスメガネ』を威圧している。なんだ邪魔をするなら容赦しないぞ、そう言っているように見えた。

『デスメガネ』はおもむろに手を挙げて言葉を放つ。

俺はこの言葉を生涯忘れることは無いだろう。

「あ、ライル。しずな先生が呼んでたよ。」

すると、彼は先ほどまでの威圧感が嘘のように穏やかになり、猛スピードで校舎に向かって走り去ってしまった。

ええー！……そんなので止まっちゃうの！？

残された者たちは微妙な空気に戸惑いを隠せない。結局事件はこれでおしまい。

この珍事はその微妙な幕引きのせいもあり、麻帆良の『変』として語り継がれていくこととなる。



## 7話 魔皇様 麻帆良の変（後書き）

古菲を倒したことによって起こるだろう物語。

しかし、なんでこんな書き方にしたんだろう？自分でも疑問です。

## 8話 魔皇様のお姉さま?! (前書き)

魔皇様だ! にあの人が参戦?!

彼岸花さんの前振りに答え私は今日も思いつくままに書き上げます。

## 8話 魔皇様のお姉さま?!

いつもは穏やかな夕食の時間、しかし今日はいつもより賑やかであった。

その理由は・・・

「茶々丸ちゃんの作る料理は美味しいわね。」

「そうだろう、俺の自慢の嫁だからな。」

「ありがとうございます。お義姉さん。」／／

女性が褒め、ライルが自慢し、茶々丸が頬を染めて頭を下げる。なんとも微笑ましい光景ではあるが、若干1人不機嫌な人物がいた。

「おい、誰がお前の嫁だ。いつもいつも言っているだろう、茶々丸はやらんとな。」

エヴァはいつものよりも落ち着いて抗議する。

だが落ち着いているのは声だけであり、よくよく見ると身体が小刻みに震えている。

「まあ、そのことはいつも通りだからいいんだ。だが、ひとつ気になっていることがある・・・。」

「なんだ、何か問題でもあるのか？わかるか、姉さん？」

「さあ？ 一体どうしちゃったのかしら？」

「問題だらけじゃあー！ 一体どのどいつだそこの女は！ 貴様も私は関係ありませんって顔して飯を食ってるんじゃないー！ い！ お前だ！ お前のことだよ！」

とうとうエヴァ山が噴火した。ここ最近で一番の噴火ではないだろうか。

「ふむ、さきほど紹介したと思うが俺の姉さんだ。」

「ここでは初めましてかしら？ 私の名前は近衛雛です。改めましてよろしく願いますね。」

ライルはなんだそんなことかと言わんばかりの顔で雛を紹介し、雛もそれを受けて名前を告げる。

「ちっがー！ 私が言いたいことはそうじゃない！ っていうよりもお前ら明らかに姉弟じゃないだろうが！ しかも女の方は近衛さらに馬鹿でかい魔力量からしてあの爺の関係者に決まっているだろうが！ ！」

「む？ そうなのか？」

「爺ってのはわかりませんが、ここに居る近右衛門であれば私の血族になりますかね。」

「そうなのか。そうらしいぞ？」

ライルは初耳です。と言わんばかりの顔で聞き、その後エヴァに伝える。

「何が、そうらしいぞ？だ！お前弟を名乗っておきながらそんなことも知らんのか！！」

「はぁ、だって会ったの今日初めてだし。」

「ええい！そこから説明しろ！」

数時間前。

ライルはちうたんの修行の息抜きとして学園内をぶらぶらと歩いていた。彼の足取りから目的のないものと窺える。

何か面白いことは無いものだろうか。

すると、突然ライルが顔を強張らせ周囲を確認し、さらに魔法使い達が騒いでいないかを確認する。

しかし、全く平穏そのものである。

なぜだ、なぜこんなにも馬鹿でかい魔力が結界を無視して現れたのに誰も騒がないんだ？！

この異常事態に気づいたのはライルだけのようだ。

ライルはその魔力反応のする方へと走って行った。

雛 Side

「ふう、どうやら麻帆良に着いたみたいです。さすがに霊体だけあって誰にも気づかれませんか。」

雛は神様の元から詠春の娘たちがいるであろう麻帆良にやってきた、つもりだった。

「おや？おかしいですね。この麻帆良にはこれほどの魔力を持つ存在はいないはずなのですが・・・。」

さらに、その魔力はこちらへと猛スピードで向かってきている。

「まさか、私の存在に気付いた・・・？」

そんな馬鹿な、雛は勘違いだと思い直す。だが、これだけの魔力の保持者である。もしかしたら自分以外の転生者かもしれない。そう思って魔力の保持者を一目見ようとそちらへ向かった。

そして決して交わることのなかったはずの人物が交わることとなる。

Side out

ライルは魔力の持ち主が近くにいることを理解している。だがその姿は見えない。

おかしい、もう見えてもいいはずなのだが。

そして、もう目の前という位置に来てその姿を発見することが出来なかった。

なぜ？魔法で姿を消しているのならば魔力くらい隠すはずだ。しかし、そうではない・・・もしかして・・・。

雛 Side

雛も困惑していた。魔力の保持者は目の前にいるはずなのに見ることが出来ない。他の人物は見えているのにもかかわらずだ。

そんな風に考えていると声が聞こえてくる。

「お前、そこにいるのか？」

Side out

「お前そこにいるのか？」

俺は意を決して話しかけてみる。帰ってこなければ敵対者と考えても構わないだろう。

「はい、あなたもそちらに？」

どうやら、敵対者ではないようだ。そして向こうからもこちらが見えていない。

「ふむ、やはりそうか。お前はここの住人ではないな？」

「いえ、生まれも育ちもこの世界のはずですよ。ただ私は2度死んでいます。1度目はここの世界ではなく違うところでしたけどね。そういうあなたも転生者では？」

「転生者？　どういうことだ？　だが俺もここの住人ではない。魔界からきた魔人だ。」

「魔界？　魔人？　聞いたことがないですね。もしかすると並行世界どうしが繋がった・・・？」

「ふむ、なるほど。並行世界ね。それはあるかもしれない・・・だが繋がったというわけではないと思う。」

「では？」

「繋がったのではなく、きっとお前は2回目に死んだときに戻ってくる世界を間違えてしまったのだ。だが、お前の存在は大きすぎるためにこの世界に認められず、中途半端な形で入ってきてしまった。だからお前はこちらから見ることができないし、触れることもできない。ただ声だけが聞こえるというそれこそ幽霊みたいな存在だな。」

ライルは小声で、ウチのクラスにも幽霊はいるんだがな。と付け加える。

「そうですか、それは困りましたね・・・。私はすぐにでも戻りたいのですが。」



「ふむ、ならば俺がその方法を考えてやろう。面白いものが見れた礼だな。だが時間がかかるだろう、だから、いったんお前をこちらの住人として呼んでやる。お前もその状態だと暇だろう?」

「それはいいですね! こちらの世界も面白そうですし、ちょっとだけお邪魔しちゃいましょうか。」

姿は見えないがおそらく手を打って嬉しそうにしているだろう。

「ふむ、では少し待て。ちょっと気分が悪くなるかも知れんが我慢しろよ?」

そう言って、目の前の存在をこちら側に魔力で強引に引っ張る。

そして段々と姿が見えて来てついに全てが現れた。白髪白眼のスタイルの良い女性がそこに立っている。

ライルはおもむろに口を開いた。

「お姉さんと呼んでいいですか?」

ライルが暴走した。

「あああら、この時期の私はこう見えても千を数える年なのだけど、けど驚いたわ、口調が男っぽかったから小さな男の子を予想してたのだけど、可愛い女の子だなんて。」

「ああ、気にするな。この見てくれたが俺も700歳だ。300歳

なんて誤差の内だろう？それと俺は男だから最初の予想で間違っていない。」

すると雛は驚いて目を見開く。

「まあ、これがうわさの男の娘なのね！けどまさか弟が出来るなんて思わなかったわ。ここにいる間だけになるけどよろしくね。だけど、300歳を誤差の内だと言い切るなんて男らしいわね、見た目は完全に女の子なのに。」

「なんだか男の子の発音が最初のと違う気がするのだが？よろしく頼む。そういえば名前を聞いていなかったな。」

「名前を聞くならず自分から名乗るものよ？」

雛が幼い子供に注意するように鼻を指で押さえて言う。ライルはそれを嫌がりもせず受け入れる。傍から見ると微笑ましい光景だが、ライルを知っているものからすれば目を疑う光景だろう。

「これは失礼。俺の名はライルⅡハーベスト。魔界を全土を統べる最強の魔皇だ。」

「魔王？でもこれだけ大きな魔力があるのだから当然かもしれないわね。そうそう、私の名前は近衛雛よ。」

「ああ、魔皇の皇はキングではなくエンペラーの方だ。皇帝というべきか？とりあえず、俺の家に招待しよう。嫁の料理を姉さんに食べてもらいたいのだ。」

「お嫁さんがいるの？そうね、行くあてもないしお邪魔するわ。」

そう言って2人は歩きだした。

## 数時間後

「というわけだ。わかったか？」

「わかるかー！ー！」

エヴァは納得いかんといった風にキレる。

「大体話が荒唐無稽すぎてついていけんわ！・・・だがそいつの魔力はバカみたいな量だ、この世界にいたのなら話を聞いたことがないはずがない。納得はしないが、理解はできた。」

エヴァはふんつと鼻を鳴らし、腕を組んで椅子にもたれかかる。

「理解できたなら問題ない。というわけでここにしばらく止めるからよろしく。」

ここでライルは空気を読まずに告げる。

「なん・・・だと・・・」

「姉弟なんだから同じ家で済むのは当然だろう？まあ並行世界に渡る方法が見つかるまでだ。」

「でも、並行世界に渡る魔法だなんて神の領域に突っ込んでるのよね。」

雛はどこか面白そうに口を開く。

「ふん、神がどうした。俺は魔皇様だぞ？」

自信満々に答えるライル。その後ろで私は許さんぞ！とかまたお前は女を増やしょって！と叫んでいる幼女がいるが、ついに構われることはなかったという。

## 8話 魔皇様のお姉さま?! (後書き)

まさかのクロス。

そして彼岸花さん雛さんを貸してくれてありがとうございます！

キャラ崩れてないですかね？

設定読みながら溢れんばかりの妄想を思いっきり振り絞って書いてみたのですが、いかがでしょうか？

書いている身としては非常に楽しく書けたので非常に満足していますが。

しかし、この1話だけで終わらせるのがもったいなかったのでもたてなづきに出てくるかもしれません。

というわけで彼岸花さん引き続きよろしくお願いします。

## 9話 魔皇様とエヴァと茶々丸（おまけでチャチャゼロ？）

「ああ、やはり日本は良いな！特に桜は実にすばらしい！」

「御主人スツカリ出来上がったナ。」

エヴァのテンションが少々高いが、それも仕方がないであろう。

今俺たちは夜桜を見ながら酒を飲んでいる。傍から見れば幼女が2人酒を飲んでもう一人の女性が酒を注いでいるのだからとても奇妙な光景であろう。

「だな。何度も桜は見たことがあるが月の光に照らされた桜というのは実に風情がある。」

「私は15年もこの学園に縛りつけられていたが、この桜だけは飽きずに毎年見ることが出来たものだ。」

エヴァは昔を思い出しているのかどこか遠い目をしている。

「だが、それも今年で見納めかもしれないと思うと少し名残惜しい。」

「なんだ、お前も今年でこの地を離れるのか？」

俺はなんとなく聞いてみる。するとエヴァは呆れたようにため息をつき口を開く。

「何を言っている、私はお前について行くのだ。わかりきっている

ことだろうが。」

「げっ、ついてくるのか?!・・・だが、俺も茶々丸の料理が食べられなくなるのは辛いし、嫁と離れ離れになるのも変な話だ。」

そう言って酒を呷る。

「ふん、毎度のことだが茶々丸はやらんといっているだろうが。」

「いつになったらお前のマスターは認めてくれるんだろうな?」

「おそらく認められることはないでしょう。」

茶々丸が残念そうに言う。ああ、本当に感情が豊かになったものだ。

「お前が私のものになればいいのだ。そうすれば、特別だが茶々丸を愛妾として認めてやらんこともない。」

「俺はつるぺたには興味無いのだ、それに妻は茶々丸と決めている。」

茶々丸が頬を染めてうつむく。愛い奴め。

「ふん、いつかは私の方に振り向かせてやる。幸いなことに時間はいくらでもあるからな。」

いつもの会話をいつもと違って和やかに行いながら俺たちはその後

も飲み続けた。

流石に飲み過ぎたのか気づけばエヴァが寝息を立てている。

俺と茶々丸は片づけを始め、エヴァを背負いチャチャゼロを頭のにせ帰宅の途につく。

「くくく、寝ているエヴァは文句なしに幼女だな。」

「ライルモ似タヨウナモンジャネエカ。」

「それは言ってはならないことだ。まあ、俺も自覚しているがな。」

他愛無い会話をしていると、ふいに茶々丸が足を止めて空を見上げる。

「どうした？茶々丸？」

「ライルさん、月が綺麗ですね。」

「ん？そうだな。」

茶々丸はその言葉を言う顔と顔を真っ赤に染めて恥ずかしがっている。

今の会話のどこに恥ずかしがる部分があったのかわからないが、きつとそれを聞くのは無粋なことであろう。

そう思って再び帰り道を歩きだした。



**9話 魔皇様とエヴァと茶々丸（おまけでチャチャゼロ？）（後書き）**

ほのぼの話です。

ああ、茶々丸かわいいよ茶々丸。

奥ゆかしく知的な茶々丸ならきつとこんな告白になるんじゃないで  
しょうか。

## 10話 魔皇様のちょっとしたためになる話？

「モンティ・ホール問題ってのを知っているか？」

俺の質問にまた始まったみたいな顔をしてこちらを見るエヴァ。

「ああ、何度か聞いたことがあるな。確かテレビでもやってたことがあるはずだ」

「うむ、直感的には納得できない問題なのだが理解できれば面白いよな」

「そうだろうが、それでどうしたんだ？」

エヴァは目で話を進めるように促す。

「なに、今日は少しためになる話でもしようかと思ったただけだ。さてエヴァ、エルスバーグのパラドックスというものを知っているか？」

「それは聞いたことがないな」

「まず、ここに二つの壺があるとする。その壺のウチ片方には赤玉と白玉が50個ずつの計100個入っている。この時の白玉が出る確率はわかるか？」

「馬鹿にするなよ？ 50%だ」

「正解だ、そして、もう片方には赤玉と白玉が100個入っているが、どちらがどれくらい入っているかわからない。この時は？」

「そんなものわかるはずがない。わからないんだから答えられないが、それがわかった上での質問だろう？それならば50%と考えるしかないだろう」

「ふむ、まあそう考えるのが一般的だろうな。さて、ここでゲームをしよう、エヴァにはどちらかの壺を選んで玉を取り出してもらう。その時事前に取り出す玉の色を答え、当たれば賞金がもらえるというゲームだ。それではエヴァ、お前ならどちらのつぼを選ぶ？」

「うーむ、そうだな私であれば最初の方の壺を選ぶな。こちらは50%の確率で賞金がもらえるのがわかっているからな」

とエヴァが選んだ理由を述べる。

「先ほど後者の壺から白玉が出る確率を50%とおいたのにそちらは選ばないのか？」

「ふん、賞金がかかっているのだ不確実なものに賭けるのは馬鹿らしいではないか」

「そうだな、その通りだ。実際多くの人がそちらを選ぶだろう。人は不確実なものを避ける傾向がある。つまり玉の割合がわからない方の壺を選ぶ人は少数派なのだ。これがエルスバークのパラドックスとよばれているものだ」

「ふーん、なるほどな。でも何でそうなるんだろうな」

エヴァが首をかしげ訊ねる。

「それを今から解説しよう。」

俺はそう言って指を立てる。

「さて、選ばなかった方の壺、こちらにも100個の玉が入っていることはわかっているのだ。もしも人が半分ずつであると考えれば最初の壺と同じ条件、つまりどちらを選んでも構わないわけだから最初の壺と後の壺の選ぶ人の割合は同じ。100人いれば50人ずつになってもおかしくない」

「そうだな、同じ条件であればどちらを選ぶかはそれこそ適当でいいわけだからな」

「そういうことだ、また人がどちらかの玉の割合が多いと思った場合、例えば赤玉が70個白玉が30個のように偏っているということだな、この時はどちらの壺を選ぶと思う？」

「そう考えるとしたら、後者の壺だな。後の方の壺を選べば70%の確率で当たるかもしれないからそちらを選ぶのは当然だろう。また、ただの予想だから違うかも知れんが」

「その通り、つまり赤と白の割合が同じではないと思ったのならはそのどちらが多いと思う方に賭ければいい。つまり後者の壺を選ぶということだ。ということは先ほと言った通り、条件が同じであると思えば半分の人が後者の壺を選び、どちらか一方が多いと思えば後者の壺を選ぶ人が多くなるはずなのだ」

「なるほど、確かに言われてみればその通りかもしれないな。安全を求める人ならば前者選ぶかもしれないが、もしかすると後者の方が確率が高いかもしれないならそちらに賭けた方がいいな」

「けど、実際はそうではなく前者を選ぶ人が多い。つまり後者の壺は先ほど述べた2つの条件のどちらにも当てはまらないと考えられる」

そういうとエヴァは意味がわからないという風な顔をする。

「さてさて、どう考えてもさっきの2つ以外の条件なんてあり得ないだろうが」

「確かにその通りなのだが、ここが面白いところなのだ。確率には主観確率というものがある、これは自分が好きに決める確率のことだな、先ほど後者の壺に赤玉が70%の確率で出ると考えることもこれのことだ。」

「なるほど、つまり主観確率というのは自分が白を引く確率が60%であると思えば60%だというわけだな。なんとも変な確率だな」

「そう言うことだ、さて話を戻すが人が前者の壺を選ぶのは後者の壺の主観確率が前者よりも低いと無意識的に感じているからであると考えられる。つまり赤玉が出る確率は50%よりも低く、かつ白玉が出る確率も50%よりも低いということだ。このとき足し合わせるとう1にならないだろう？これでパラドックスが起こる原因が証明できたと言えるはずだ」

「はあ、なるほどな。しかし、確率を足し合わせて1にならないなんておかしいこともあったものだ」

「そう、その埋まらなかった%の分だけ人は不確実性を感じている  
ってことだな」

「ためにはなったが正直それがどうしたって気もするぞ」

「それは言わない約束だぜ？」

## 10話 魔皇様のちよつとためになる話? (後書き)

エルスバークのパラドックスです。

正直ちよくちよくおかしいところがあるかもしれませんが。じゃあ何故書いたって話ですが・・

それは別としてこの説明で少しは理解してもらえたでしょうか? 理解できればなるほどねーっていうちよつと面白い話だと私は思うのです。

理解できないって人がいるのならば私の説明が悪いということですが、ここよくわかんないんだけどってところがあれば教えて下さい。活動報告にでも書こうと思います。ただ専門家ではないただの一般ピーポーなので厳しい質問には答えられないのですが・・

そういえば、感想を貰って返せていないのですが皆さんはいったいどうやって返しているのでしょうか?

今さらな話なのですが、貰った方々には申し訳ないことをしました。

## 11話 魔皇様 仕方がない

「勉強なんて将来役に立たないんだからやっても仕方がない」

「いきなりどうした？」

俺の言葉に律義に反応するエヴァ、うんうんこういうところはコイツの良いところだな。

「いや、なに学生をしていると必ず聞く言葉だろう」

「まあ、確かに。それでそれがどうした？」

「ふむ、俺の経験則ではあるがこの言葉を使うやつは大抵勉強が出来ないやつだ。意味がないという言葉によって自分が勉強を出来ないことを正当化しようとしているわけだな」

「そうだろうな、自分が勉強できないという事実を受け止めるのはなかなか難しいものだ」

エヴァは自分の言葉に頷いている。

「それはそうだが、理屈が通っていないのだよ。その言葉が許されるのならばどんなものでも正当化できるはずだ」

「それで？ 例えばどんなものだ？」

「例えば、今日は雨が降っているから学校に行かなくても大丈夫とか」



「それはまた全く理屈の通っていない話だな、しかし自分が学校に行かないということを正当化しようとしているのはわかる」

「そう、つまり言う人間がそのことを仕方ないと思おうとすればそれは仕方なく感じるということだ。ま、俺がエヴァをいじめるのはエヴァが幼女だから仕方がないって話と同じだな」

「ちよつとまで、お前そんな理由で私への態度が冷たかったのか？」

エヴァは信じられないといった顔をしながら俺を見る。

「そんなことはどうでもいいだろう。さて、今日は姉さんと風呂に入るかな」

「あらあら、ライルったら」

俺の言葉に姉さんがうふふと口元を隠して笑う。うむ、美人が笑っている姿は絵になるな。

「どうしてもよくない！それと一緒に風呂に入るなど私の家でそんなこと許さんぞ！」

「なんで？姉弟なんだから問題ないだろう？」

「お前たちは赤の他人だろうが！！！！雛お前もあらあらとか言っていないで止めに入れ馬鹿ものが！」

まあ、確かに血縁上でも戸籍上でも他人だけど、多分大丈夫なはず

だ。

「そして、寝るときは茶々丸と一緒に寝ることにしよう。何て言っただけだ。夫婦だからな！」

「ライルさん・・・」／

「ライルっ話を聞け！茶々丸も顔を赤くしてないで断らんか！ええい！こんな話認められるものか！！」

エヴァが色々と煩かったが皆いつものことなので気にしないことにしたらしい。

ちなみに、姉さんと風呂に入ろうとしたら見事に簀巻きにされてしまった。ギャグ補正でも何でもなくまさか本気でやられてしまうと・・・伊達に1000年生きてない。

「さて、読者の諸君。毎度毎度全く面白くねえよ、なんて思っていないかな？けどそれもいたしかたないことなのだ、なぜなら書いてる作者に文才が無いのだからな。」

## 12話 魔皇様 衝撃の事実

「さあ、今日も張り切って修行をしよう！」

最近ちうたんも魔法に慣れ修行をするたびに成果が見て取れるようになってきた。そのことが少し嬉しく思い若干テンションも上がり気味だ。

「なあ、ライル」

しかし、当のちうたんのテンションは低い。

「ん？どうした千雨？」

「いや、そこにいる女の人は誰だ？私の記憶では前回の修行のときにはいなかったと思うんだが・・・」

そういつてちうたんは1人の女性を指さす。

「全く、千雨何を言っているんだ。いなかったに決まっているだろう」

俺はこれ見よがしにため息をついてみせる。

「その態度はおかしくないか?!」

「まあ、そんなことはどうでもいい。とりあえず紹介しよう。俺の姉さんだ」

「初めまして、近衛雛です。よろしくね」

そういつてぺこりと頭を下げる姉さん。

「ああ、ご丁寧にどうも・・・って姉?! つーか今この人近衛って言ったよね!? 日本人じゃん! めっちゃ日本人じゃん!」

ちうたんはこんらんしている。

「まあ落ち着けちうたん・・・おっと失礼千雨。とりあえずこの人は俺の姉だ。血は繋がっていないし戸籍上も他人だが、そんなこと些細な問題だろう?」

「全然些細じゃねーよ! むしろそれが些細だったら世の中兄弟姉妹で溢れかえっとるわ!」

「ふむ、確かにそうだ、これは一本取られたな」

「もう、ライルったらうっかりさんなんだから。うふふふ」

「なんで和んでんだよ! そっちのあんたも、うふふじゃねえ!」

「千雨さん、そんなに叫んで疲れない?」

「疲れてるよ、お前たちのせいだな!・・・はあはあ、ところであんたも魔人なのか?」

やはり疲れたのだろうか、ちうたんの突っ込みはかなり無理してそうだもんな。

息を整えてちうたんは姉さんに尋ねる。

「私は元人間かしら。いまは半神半人ね」

「おお、そうだったのか。転生者って聞いてたから人間だと思っていたのだが」

「え？何？“元”人間？半神半人？転生者？おまけに白髪で白眼、どこの二次創作の主人公だよ・・・」

ちうたんがいろいろと危ない事を言っているような気がするが、俺には具体的にどこが危ないのかわからなかったので放置することに決めた。

「そういえば、姉さんは俺のことも転生者かと聞いていたが転生者とはそんなに多いのか？」

「それはわからないけど、いるかも知れないわね。あと・・・うーん、これは言ってもいいのかしら？」

そう言いながら姉さんはちうたんの方をちらりと見る。

「もうこれ以上何を聞いても驚かねえよ。それこそ私たちがおとぎ話の住人ってのも納得できるぜ」

「なかなか良い勘してるわね。実はここ私のいた世界では漫画として描かれていたのよ」

「・・・マジかよ」

そういつてちうたんはしゃがみこんだ。目がうつろで時折あはは、私って実はファンタジーの世界の人間だったんだな・・なんて声が聞こえる。

「ふむ、なるほど。ということは俺や姉さんはその漫画には登場しなかったという訳だな？そして姉さんは死んで何らかの原因で漫画の世界に蘇ったと」

「そういうことよ。私の場合は神・・かどうか怪しい人物に転生させられたの、力付きでね」

神ねえ、俄かには信じられんが姉さんの力は確かに異常だ。となる。とこの世界は神によって管理されているということになるのか・・気に食わんな。

「なるほどな、それで蘇ったときには半神半人だったのか？」

復活したちうたんが姉さんに質問する。

「いや、スクナという鬼神を取り込んだせいよ。でも神(?)によるとそうなる予定だったみたいですけど」

「はあ、もう何が現実で何が仮想なのかわからなくなってきたよ」

「なに現実だと思ふものを選びとればいい。現実と仮想の線引きなんて人によって違うものだ」

「そうするよ」

その後ちうたんと修行をした。俺は教えるのが上手くないので姉さんに頼んだのだが、見れば出来るようになるという能力のせいであまり俺と変わらなかった。修行中のちうたんはさすがに精神的に参っていたのかいつものようにはいかなかったが、これもコンディションの悪い時の練習だと思えば良い経験にはなっただろう。

しかし、今日の話はなかなか興味深かった。並行世界に世界の管理人ねえ・・しかもここは漫画の世界だというではないか。だが俺というイレギュラーがいるという点ではオリジナルなのかもしれないが大まかな流れは同じなのだろう。

さて、姉さんを元の世界に戻す研究もとっかかりが手に入った。いままでは漠然と世界移動魔法のグレードアップ版だと考えていたが、どうやら全ての並行世界の根っこには管理人が存在する世界があるようだ。もし管理人を見つけることが出来たなら姉さんを元の世界に戻すことが出来るかもしれないな。その方向で研究を進めるとするか。

## 12話 魔皇様 衝撃の事実（後書き）

ちうたんと彼岸花さん家の雛さんを絡ませたかったのですが、思いもよらぬ方向に。

行き当たりばったりですみません。



### 13話 魔皇様 エヴァさん家の一日

「エヴァ、暇なんだが」

今日は何も面白そうなことが思いつかず、エヴァに何かないか訊ねた。

「そんなもの私に言われてもしらん。だが、ゲームでもしたらどうだ？」

エヴァはお気に入りのソファに座り紅茶を飲みながらくつろいでいる。俺の質問に面倒くさそうな顔をしながらも答えるあたり人が良いのだろう。幼女じゃなければもったいいのだが。

しかし、ゲームか。RPGのようなチマチマとレベル上げをするのは正直性に合わないのだが・・・

「仕方ない。カバディでもするか」

「はっ？何でカバディ？」

エヴァは意味がわからないと言った表情をする。だがそんな顔をされても困る、俺だって意味がわからないのだから。

「何でといわれても思いついたから口にしたまでだ、理由などない」

「いや、他にも色々あるだろうが」

「では、私が守備側に回りましょう」

そう言っているままで黙々と作業をしていた茶々丸が立候補する。

「いきなりどうした茶々丸？」

「そうか、ならば俺が攻撃側だな」

「いや、お前も乗るなよ。そして話を聞け」

「ジャア、俺ハ審判ヲシテヤロウ」

「おい、チャチャゼロお前もか。そしてお前たちいい加減に私の話を聞け！」

エヴァは少しずつイライラしてきている。

「姉さん、すまないが守備側に参加してもらえないだろうか？」

「そうねえ、いいわ、やってあげましょう」

「だぁー！無視するな！」

とうとう臨界点を突破したエヴァ、そして俺たち4人はエヴァに対して空気の読めない子を見るような視線を送る。

「なんだ、その目は！私が悪いのか！？違うだろう！」

「はいはい、エヴァちゃんは良い子ですからねー。悪いことなんてしてませんよ」

「ええい！ライル鬱陶しいからその口調はやめろ！」

「マスターはお腹がすいてるんですよね」

「ちっがーう！ええいこのポケロボまいてやる！」

そういうながらエヴァが茶々丸のねじを巻く。しかし、茶々丸がエヴァをからかうとは思ってもみなかった。

「ふう、それでエヴァは何が言いたいんだ？」

「だから、何故カバディというマイナースポーツを選んだのだ。他にもあっただろう」

エヴァの話した内容はべつに聞くほどのことでもなかった。だが、よほど無視されたのが嫌だったのだろう。エヴァの目は少し涙で潤んでいる。

「なんだ、そういうことか。わかったよ、お前はかくれんぼがやりたかったんだな？」

「は？」

「仕方ネエナ、御主人ノワガママヲ聞イテヤルノガ従者ノ務メツテヤツダ」

「そうですね、姉さん流石です」

「いや、お前たち意味がわからないんだが」

「では鬼は誰にします？」

姉さんが皆に聞く。

「ここは言い出しっぺのエヴァだろう」

「いや、言い出しっぺは明らかにお前だな」

エヴァが何か言っているが耳には入らない。

「じゃあ俺たち隠れるから、ちゃんと30秒数えろよ？ 範囲は麻帆良内だ」

そういつて俺たちは隠れる場所を探して走り出した。

「おい！ ちょっと待て！ それって実質どこでもありじゃないか！？」

エヴァの声が遠くに聞こえる。

そして、夜。俺たちが皆で食事をしているとエヴァが家に帰ってきた。エヴァは大量の汗をかいていて、顔を見ると疲労感で一杯である。その様子からどうやら今まで律義に探していたらしい。俺たちが皆家にいることを確認するとどこかほっとした顔になり、そして涙を堪え部屋へと走って行った。

流石に可哀想だったので翌日はエヴァのご機嫌をとり、なんとかエヴァの機嫌を直すことが出来た。エヴァの要望で一緒の布団で寝ることになったが、今日ばかりは仕方がないだろう。

## 14話 魔皇様について

あーテストス。ちゃんと入ってるかな？

ん、大丈夫みたいね。

えー、今回の話はライル君ではなく、麻帆良パラッチこと朝倉和美が担当するよ！

知っている人もいると思うけど、私は修学旅行でライル君のものになったの。ライル君のことは結構好きだったから嫌だとは思わなかったんだけど・・そこでふと思ったわけ。他の人はライル君についてどんなイメージを持っているんだろう？って。ということではライル君と関わりのある人たちにライル君について聞いてみよう！

ケース1、ロリっ子同居人とその従者

ライル君についてどう思う？

「ん？そうだな、あいつはいつも私も私を困らせてばかりだ。それに私のことを子供扱いするしな」

「それはマスターの身体的特徴のせいだと思われます」

「くっ、お前も最近生意気になってきたな・・」

○々丸さんは？

「私ですか？そうですね、とてもいい人だと思います。マスターさえ許してくださればライルさんの妻になれるのですが」

「誰が許すか！お前は私の従者だろうが！大体ライルもなぜ私ではなく〇々丸を・・・」

「それはマスターがロリだからでは？」

「ええい煩いわ！このポケロボ！まいてやるっ！」

話が聞けそうになくなったのでこの2人はここまで。この二人は黒つと。

ケース2 子ども先生とその保護者

「ライルさんですか？すごく強い人ですよ」

「まあ、たしかに強いわよね。この前なんてあり得ないくらいの魔法を撃ってたし・・・でも怖いっていうことはなくて、むしろそれよりは変態っていうイメージの方が強いわ」

「明日菜さんあんまりそう言うことを大きな声で言うのは・・・」

「何よ？本当のことじゃない。容姿はどう見ても女の子だから余計に困るのよね」

「そうですよね。京都では一緒にお風呂に入ったんですけどなんだかライルさんを見るのが恥ずかしかったし。」

「そういえば、そんなことあったわね・・・」

京都での出来事を思い出したのか、保護者が落ち込んで話しかけても返事がなかったたのでこの2人はここで終了。この二人は白ね。

### ケース3 眼鏡をかけた姉弟子

「は？ ライルについて？ いきなりだな」

まあまあ気にしないで思ったまんまを話してくれればいいからさ

「そうだな・・・まずは変態だな。容姿があれだからあんまり嫌な感じはしないんだが、普通の男だったら通報されてもおかしくないだろう」

まあね。あの容姿だから許されてるってところもあるかも。

「だよな・・・つーかあいつが罪を犯したら一体誰が捕まえるんだ？ はっきり言って無理だろ？」

あはは、そうだね・・・まあそうならないように祈っておこう。

「あとは、そうだな。趣味は合うかな。それとあいつ優しいところがあるしその辺も憎めない要因だろうな」

そうだね。結構優しいよね。

「ああ。そんなところは嫌いじゃないけどな。私も実際助けられた



し」

ほうほう、そうですか。ところで少し顔が赤いのはなぜ？

「ばっ、カメラ止めろ！つーか赤くなってねえ！」

その後の抵抗によって取材が困難になったのでこの人はここで終わ  
り。うーん、限りなく黒に近いグレーって感じかな。

ケース4 お嬢様とその護衛

「んー？ライル君のことどう思うかやって？」

「急にどうしたんですか朝倉さん？」

ちょっと気になってね。今いろんな人に聞いて回ってるところ。

「はー、そうなんや。うーん、ライル君めっちゃかわええよなー」

「は、はあ。まあ容姿は確かにそうかもしれませぬ。ただ度し難  
い変態ですが」

「あはは、確かにちよつとえっちなかもしれんね」

「ちよつとどころではありません！」

まあまあ桜○落ち着いて。

「すみません。少し取り乱しました」

「○っちゃんはライル君のことになると直ぐに取り乱すよなあ」

「それは・・・あいつを放っておくとお嬢様に危害が及びますから・・・」

「お嬢様やのーて名前ですんでや。でもほんまにそれだけなん？」

「うっ、すみません。未だに癖が抜けないみたいで。それだけっていうのは？」

「うち、○っちゃんが教室でよくライル君のあとを目で追っかけてるの知ってるで？」

こ○かそれは本当？

「ななな、なにを言うんよ、こ○ちゃん！」

この慌てようは怪しいね。

「○っちゃんはうちよりライル君の方がええんやね。よよよ」

「こ○ちゃん、誤解やって！」

こ○かが桜○をからかい始めたのでこれ以上聞くことはできなくなつた。こ○かは白、桜○はグレーかな。

こうしてみるとライル君意外と好かれてる？うーん、これは結構大変かなあ。

ケース5 イエローとブルー

「ライルのことアルか？私じゃ敵わないほど強い人アル」

「2人がかりでも遊ばれたでござるからな」

そうなんだ。戦ってるところを見たけど確かに強いよね。

「人の域を超えてるアルよ。今の目標はライルに一撃を入れることアル」

「ふむ、拙者もライル殿に少しでも追いつけるように日々修行中でござる」

修行って忍者の？

「ん？忍者とは何のことでござるか？」

あくまでしらを切るのね・・・。

「そういえば、この前ライルにコスプレさせられたアル。あれは大変だったよ」

「はあ、それは災難でござるな。拙者もデートに誘われたのでござるが・・・それを聞いて少し不安になったでござる」

ふーんデートね。ライル君手が早いなあ・・・

この二人はここで切り上げることに。この二人については白かな。あ、でもイエローは強い男の人が好きって言ってたからこれからどうなるかわかんないか。

聞き込みはこの辺で切り上げようかと思ったらある2人に出会ったのでついでに聞くことに。

ケース6 ショタコンとどう見ても中学生ではない人

「ライルさんのことですか？そうですね、非常に可愛らしい方だと思いますわ」

「そうねえ、ちょっとエッチだけど不思議といやらしい感じはしないのよね」

そうよね。確かに胸を見たりするけどいやらしいって感じはしないよね。

「ですが、もう少し自重していただけると助かりますわ」

「あ○かの大好きな男の子だものね」

「うっ、わたしにはネ○先生という心に決めたお方が！」

けどライル君って遺伝子のせいであれ以上成長しないって言ってたよね。

「うう。ライルさんも素敵・・・はっネ○先生誤解です！お待ちになってください！」

「あらあら、あ○かったらまた妄想に浸って」

那○さんは他に何かある？

「うーん、ライル君は見た目は子どもみたいなのに雰囲気は大人・・・いえ、もっと上の感じがするわ。私と話してる時もたまに子ども扱いされることがあるし」

へえ、そうなんだ。那○さんを子ども扱いってなんだか不思議だね。

「それはいったいどういうことかしら？」

うっ、なにか後ろに見えるよ那○さん！

「でもそれがちょっと嬉しかったりするのよ。どうしてかわからないけど子ども扱いされることなんて滅多にないもの」

あははは、そうだねどうしてかわからないね！

この場の雰囲気についていけなくなった私は急用を思い出したと言って2人の前から走り去った。

いいん○よは怪しいけど先生がいる限り白かな。那○さんは意外と好感度高いけどまだ白って感じかな。

さて、今日はおしまい。皆の共通認識としてライル君はエッチって事みたいだ。まあ間違っただけだね。けどいろんなところで案外好感度をあげてるみたいだから私もうかうかしてると危ないかも。

それでは取材終了！

ケース7 とアル変態

「ん、ライルについてですか？そうですね彼は私にとって世界を広げてくれた恩人と言ったところでしょいか」

「彼と出会ったときはまさに雷が落ちたかのような衝撃を受けましたね」

「今思えばあの頃の私は若かったのだと思います。ええ、彼の前に性別など些細な問題ですよね」

「残念なことに彼は女子用の服を着てくれないのですが、でもそこが逆に良いって思うようになったりしまして」

「ん？私ですか？私はただのファンクラブの名誉会長ですが？ふふふ、彼はこっちではかなりの有名人ですよ」

「え？何で有名か？それは記者さんご自分で調べてください。なに直ぐにわかりますよ」

## 14話 魔皇様について（後書き）

思いつきで書きました。

ライル変態説・いや説ではないんですけどね。ライルがあれほど好きに出来るのは容姿も関係しているわけです。ま、普通の男だったら大変なことになってますよね。



## 15話 魔皇様 さようなら姉さん

姉さんから衝撃の事実を知らされてから3日経った。姉さんの言葉によると神つてのがいるらしいのだが、この世界の神とごっちゃになりそうなので管理人という言葉を当てることにした。

さて、この世界はどうやらその管理人によって監視および管理されているようだ。あまりこちらに干渉してくることはないようなので危険ではないだろうが、不愉快極まりない。

だが、そんなことは今はどうでもいいことだろう。今は姉さんを元の世界に戻す事の方が重要なのだ。

姉さんがこちらの世界に来たということからこの世界と姉さんのいた世界は根幹が同じであると考えられる。その根っこの部分にはおそらく管理人が存在し、そこまでいけば姉さんも元の世界に戻るこ  
とが出来るはずだ。

「姉さん、二度目の死因って何だったんだ？」

「確か、神が言うには世界の修正力が働いたとかいってたような。私があまりにも原作に介入し過ぎたことがその世界には気に入らな  
かったらしいですよ」

「ふーん、だったら何で姉さんは今も生きてるんだらうな？」

「それは私が不死だからとか」

「なるほど、不死になったために世界も存在を消すことが出来なか

ったのか」

「みたいですよ。それで一旦神のところに戻ったあとにもう一度世界に入ったつもりだったんですが、気付いたらこちらの世界にいたんですよ」

ふむ、入り込もうとしたところを世界によって弾き飛ばされたってところだろうか？

「こちらの世界に來た時に違和感とかはなかったか？」

「そういえば、來たばかりの時にはライルだけは見えなかったんですよ。他の人は見えたからそれが不思議で」

「へえ、それは俺がこの世界独自の存在ということが関係してるのかもしれないな」

そう答えて考える。恐らく俺たちには何らかのフィルターでもかかっているのだろう。姉さんは両方の世界の共通している部分は見ることが出来るがむこうに存在しない俺は見えない、こちらでは姉さん自身が異物であったため誰も感知することが出来なかった。だがこの世界の元となった原作からすれば俺も同じ異物。見ることはできないが感知することが出来たのはそのためなのかもしれない。

その後俺が無理やりフィルターを通して、こちらの世界で認識することが出来るようになった訳だが・そのせいで姉さんの所属が曖昧になってしまった。やはり後先考えずにするもんじゃないな。

だがそれも怪我の功名だった。管理世界の位置を見つけるには異なる3つの点があればいいわけだから、この世界の俺と所属が曖昧に

なった姉さんそれにもう一つ向こうの世界の目印。それが存在すれば恐らくその応用で管理世界にいけるはずだ。

そのまま姉さんの世界に移動する魔法でも良いのだが何があるかわからんしな。その辺は神という名の管理人の専門分野だろう。

「ライル、急に考え込んでどうしたんですか？」

「いや、姉さんの世界に目印になるような存在がいれば管理世界を見つけることが出来そうだって考えていたんだ」

「それは私の残した残留魔力とかではだめなんでしょうか？」

ふむ残留魔力か。

「それだと少し弱いかもしれない。出来るならばこちらには存在せず、姉さんの世界だけに存在するものが好ましいのだが」

「あ、それならありますよ」

「本当か!？」

「ええ、実は私の死因となった刺客なんです、木乃香の双子の姉として私の世界に存在しています」

「なるほど、だが何故その子どもが死因に？」

「実はその子は生まれながらにして内臓と右目がやられていたの。それで私の臓器と右目をその子に移植してあげたんですよ」

「それはまた世界もエグイことをするな。だが今回はそれに感謝しよう。そのおかげで戻ることが出来るんだしな」

まあ、それが無ければ死ぬこともなかったんだが・・・とにかくこれで条件は整った。

手掛かりを得た俺は早速並行世界間移動魔法の構築に励む。

まずは木乃香の姉が存在する世界を探す。

結構多いな。

その中から名前で検索し、そのうち臓器を移植したことのあるものを探す。

こんな風にドンドン絞り込みをかけていくのだが、馬鹿みたいに魔力を使うしなにより相当面倒くさい。

管理人はこんなことを平気でやってるのか・・・どうりで姉さんみたいにホイホイ能力を与えられるわけだ。まあもしかしたら姉さんの言う神力ってのがみそなのかもしれないが・・・

魔力がすぐに枯渇しそうになるので急遽魔法球の時間差を引きのばす。内外の時間差を1時間で1日に変更し、数か月にわたって探し続けた。

その結果ようやく姉さんの世界を発見する。

ああ、疲れた……。これだけの量の魔力を使ったのは生まれて初めてだ。

後は姉さんと俺そして発見した子どもの情報を使って管理世界の位置を割り出し、そこへ移動するための魔法式を構築する。これは既存の世界間移動魔法を弄れば大丈夫なはず。

そして不備が無いか何度もチェックをしてようやく完成。

もう、ゴールしても良いよね・・

とか言ってる場合じゃない。

俺は魔法球の外に出て姉さんの元へと向かう。

「姉さん、完成したよ」

そう言うのと姉さんの顔がぱあっと明るくなる。その場にいたエヴァも目を見開いて驚いていた。

「はあ、これでようやくこのやっかいな居候ともお別れか」

エヴァはさも清々する、といった言葉を発するがその声音はどこか寂しそうである。

「今までありがとう、ライル、エヴァちゃん、茶々丸ちゃん」

「なに弟が困っている姉さんを助けたただけだろう？」

「寂しくなりますね」

「結局一度モ切り合ウ機会ガナカタナ」

「ふん、まあ何かあったらまた来い」

「それは私にもう一度死ねってことかしら？」

「そういう意味じゃない！」

しんみりとした雰囲気ですこし和らいだところで、お別れパーティの準備をし、宴を始めた。姉さんはチャチャゼロを抱えて食事をし、エヴァは姉さんに対してどれだけ苦労したかとか私に感謝しろよ？とかグチグチ言っている。だがその顔は楽しそうだ。茶々丸も給仕をしつつも暇を見つけては姉さんと会話をしている。姉さんは短い期間ではあったがこの家になんか馴染んでいたようだ。

そんな宴も終わりが来る。エヴァと茶々丸、チャチャゼロはその場で別れの言葉を交わし、姉さんと俺は魔法球へと向かった。

「さて、姉さん。この魔法式で姉さんのいう神のいる管理世界に行けるはずだ。その後管理世界から元の世界に戻るとき弾き飛ばされないようにするのは神に任せる。正直俺は並行世界に行ったことが無いからその辺はわからんしな」

「わかりました」

「まあ、その神には少しだけ感謝しておこう。こうして姉さんに出会えたのだからな。じゃあ、今から発動するが、こちらの世界と向こうではどのくらい時間差があるかははっきりとわからない。何十年も違うってことはないだろうが、恐らく少しずれてしまうはずだ」

「大丈夫ですよ、ライルの作ったものですもの信頼してます」

「面と向かって言われると少し恥ずかしいものだな。じゃあな、姉さん。向こうでも元気でやれよ？ 後これは餞別だ。俺のアーティファクトで作ったものだから役に立たないということはないはずだ」

「ありがとうございます、大事にしますね。それでは、ライルも元気で」

その言葉を残して姉さんはこの世界から消えた。

さて、今夜は寂しがつているはずのエヴァと酒でも飲み明かすかな。

## 15話 魔皇様 さようなら姉さん（後書き）

雛様の御帰還！

それにしても最後まで雛姉さんの口調が安定しなかった。

てか、ライル凄すぎね？ 神の領域に片足突っ込んでるし！ とか思いつつ書いてました。

まあ、主人公補正で大丈夫ですよ？ あと雛さんへの餞別は彼岸花さんに丸投げします。

お別れの場面で何もしってのはどうかなーと思って入れたのですが、使いづらかったら無視してもモーマンタイです。



## 16話 魔皇様と地雷原

カチッ、カチカチ。

静かな空間にマウスをクリックする音が響く。そのリズムは不規則でテンポよく鳴っている時もあれば、長い間音が止まることもある。いったい何をしているのかと俺はパソコンの画面とにらめっこしているエヴァに近づいていく。

「エヴァさっきからなにをやっているんだ？」

「ん？ ああ、ライルか。今マインスイーパーをやっているところだ」  
ふむ、あれか。

「暇つぶしでやり始めたのだが妙にハマってしまっとな」

エヴァは視線をこちらに向けることなく話を続ける。

「確かに単純なゲームはハマると延々とやり続けてしまうよな」

「ああ、面白いって訳ではないんだが、どうにも止められん」

すると、不意にエヴァの手が止まる。

「くっ、またこの形か・・・」

画面を見てみると残り4マスに対し爆弾が2つ残っているという状

況であつた。

「仕方ない、適当に・・・」

そういつてエヴァが右下のマスを開けようとポイントを動かしている。

「ふっ、本当にそこでいいのか？」

俺は意味深なことを言ってみる、が意味はない。

「どういうことだ？こうなったらもうどうしようもないではないか」

「確かに、確かにその状態から論理的に地雷のある場所を特定することは不可能だろう」

だが・・・と続ける。

「お前はその右下のマスに命をかけることが出来るか？」

「はぁ？お前は一体何を言っているんだ？」

知らん、俺もただ何も考えずに口から言葉を発しているだけにすぎんのだからな。

「くくく、何を言っているのか、か。全く闇の福音も落ちたものだな」

「なん・・・だと・・・？」

「お前は600年という年月を生きてきた悪の魔法使いなのだろう？ならば命の危険などは腐るほどあったはずだ」

「それがどうしたというのだ」

「ふっ、ここまで言ってもわからんとは・・・」

やれやれと言わんばかりに手を広げため息をつく。さてここからどうするか。

「ええい、まだるっこしいな！さっさと結論を言え！」

「何ただ本当の強者であるならばその1／2という確率であつたとしても外すことはないはずだ」

「はっ馬鹿馬鹿しい。だれが選ぼうと確率は変わらん」

「本当にそう思うか？お前にもあるはずだ、自分の力ではどうにもならなかったことが、もはや勘と運に頼るしかなかった場面がな！」

「?!」

「そう、常に命の危険に付きまとわれようとも、それを乗り越えることが出来る真の強者であれば50%の確率など当てて当然。なぜならそれが出来なければ今ここに存在することが出来ないからだ！」

なんて言ってるが正直そんな場面なかったよなー、なんて思いつつも顔は至極真面目に保つ。

エヴァもそんなのあったかって言う顔をする。

「なるほど、確かにそうだ・・くくく、この私としたことが長い間ぬるま湯につかった生活をしていたせいで緩んでいたようだな。そう、私はどんな困難も乗り越えてきた。それこそ1歩間違えれば死んでしまうような事さえあった。それに比べればこんなゲームの確率なんぞなんてことはない」

だが、乗ってきた。エヴァ家の皆は最近妙に壊れて来ている気がするぜ！

「そうだ、さあ勘を研ぎ澄ませ！運を手繰り寄せろ！確率さえも捻じ曲げてしまえ！今日ここに闇の福音は完全復活するのだ！」

「よかろう！私の真の実力とくと見るがいい！」

そう言ってエヴァはマウスを素早く動かし右下を選ぶ

あなたの負けです。次回は頑張ってください。

俺とエヴァの間に妙な空気が流れる。

「ドンマイ」

「そういう慰めやめてくれる？」

今日の晩御飯は茶々丸に言ってエヴァの好物にしてもらった。

## 16話 魔皇様と地雷原（後書き）

マインスイーパーを嗜む者であればだれもが遭遇する場面。

最後までできてそれはないわー、っていう気持ちを表現したくて書き始めたのに出来上がったものは全く別物。

## 17話 魔皇様 わかりそうでわからない少しわかる話

「このゲームはクリアしたし、これは面白くなかったしな・・・」

今日は珍しくゲームをせずに過ごしていたエヴァ、しかしあまりにもやる事が無さ過ぎたのか結局ゲームをあさり始める。

「はあ、どれも気が向かんな。お、ライルいいところに来た、何か話をしてくれ」

そんなエヴァに見つかってしまい何とも自分勝手な要求をされる。ここで突っぱねるのは簡単である、だが話を振られたら応える、それが俺のポリシー。

「ふむ、そうだな。そういえば辛そうで辛い少し辛い〇ー油と言うのが流行ったが」

「そういえばそんなものがあつたな。何故流行ったのかイマイチ私にはわからんが」

「それは今はどうでもいいのだよ。それで結局その〇ー油は辛いのか辛いのかどっちなんだ？」

「はあ？そんなもの書いてある通り少し辛いんだろう」

エヴァは心底どうでもいいと言わんばかりな様子である。

「だがそれならば少し辛い〇ー油で良いではないか」

「それだとインパクトが無いだろう」

なるほど、確かに商品なのだからそうかもしれないな。

「む、今思っただがこの表現方法を使えば微妙な感じを的確に表せるかもしれん」

「まあ、使おうと思えば使える表現ではあるな」

「と言う訳で今から色々言ってみるから心して聞け」

「またお前はアホみたいなことを」

と言いつつも暇だと話を振ったのはエヴァの方なので静かに話を聞く体勢になる。

「では、面白そうで面白くない少し面白い小説」

「ふむ、小説のタイトルやあらすじを見ると非常に面白そうであったが期待するほどではなかった。だが全く面白くないというわけではないって感じか」

おお、まるで14まで出ている最近のF〇のようだな。

「では次、偉そうで偉くない少し偉い学園長」

「ああ、確かにあいつはそんなイメージだな。だがその表現を使うほどのことでもないだろうに」

うむ、ちゃんと伝わっているようだ。



「見えそうで見えない少し見えたパンチラ」

「・・・いや、まあ確かにそういうものかも知れないがこれもその表現を使ってまで表現することなのか？」

「ふう、わかっていないな。この表現を使ってこそパンチラの素晴らしいさがわかるというものだ」

「はあ？」

「いいか？パンチラとは見えるか見えないかのギリギリを楽しみつつもほんの少し見えたという事実が我々を夢中にさせるのだ。こうぶわっとスカートが捲れて見えたパンツも確かにいいものがあるがそれは残念ながらパンチラとは言わない。あくまでも、あくまでもギリギリこれが重要なのだ！」

「アホくさ」

アホくさいとは失礼な奴だ。・・・だがまあ、このよさは男にしかわからんか。

「エロそうでエロくない少しエロい服」

「・・・もはや理解したくないのだが」

「エロそうなんだけどその服自体は本当はエロくない。しかし男の妄想を駆り立てるという意味では少しエロい服、つまりナース服だな」

「なにがつまりなのか全く分からない」

「はあ、これだから幼女は・・・」

「いや関係ないから」

その後結局グダグダして2人で対戦ゲームを始め、この話題はすっかり忘れ去られてしまった。

## 18話 魔皇様 主人公なら持っている？

「うーむ、やはり主人公にはアレが必要不可欠みたいだな・・・というよりもラカンでさえ持っているのに俺には無いというのが問題だ」

ライルはエヴァおすすめの漫画を読みながら思索する。

「やはり、こうガツときてグツとなってドツカーンって感じではないと迫力に欠けるよな」

最近漫画を読んでいたせいか、少々毒されているようだ。

効果音のところで身体を動かしている様子はまるで子どもが一生懸命まわりに説明しようとしているようだ。

「うーむ、だがやはり何かが足りない」

腕を組んで頭を捻っているが成果は上がっていない。

「ところでエヴァは持っているのか？うーむ、聞いてみるか」

ライルは自分の部屋から出てリビングへと向かった。

リビングに到着すると、エヴァはソファに寝転がりお菓子を食べてながらゲームをしているところであった。

エヴァの横にはチャチャゼロが座ってゲームを見ている。

「エヴァ、必殺技ってあるか？」

前振りも何もない唐突な質問。

だがエヴァ家では最近当たり前になりつつある光景である。

「あー、あるよ。あるある。私ぐらいになると必殺技なんてない方がおかしい」

エヴァは一度もゲームの画面から目を話すことなくおざなりに返事をする。

「ふむ、そうか。やはり必殺技の一つや二つないと格好がつかないよな」

「そうだなー」

再び黙考するライル。そこにちよこちよことチャチャゼロが歩いて近づいてくる。

「オイオイ、ライルマサカ持ッテネーノカヨ？」

「そうなのだ。俺の力ではただの攻撃でさえ必殺だから考える必要が無かったしな」

「ケケケ、確カニソウダナ」

「だがそうも言っていられない。必殺技のない主人公などてんぷらのない天井ではないか」

「ソリヤモウ天井ジャーナ」

よくわからない例えではあるがライルが必殺技の重要性を説こうとしていることだけは汲み取れる。

「しかし、ノリで決めるのも良くない。何せ必殺技だからな」

必殺技だからどうだというのだ。

「ケケケ、ドウセナラ魔皇ニフサワシイド派手ナヤツニシヨーゼ」

「なるほど。それは盲点だった。確かに主人公の必殺技はスマートでありつつも絶大な威力を持っているものが多いが、俺は漫画で言うならば悪の親玉。ならば派手さが重要となる・ふむ、なかなかいい意見だ」

「アア、ライルノ魔力ナラ漫画ニアルヨウナ魔法ガデキルゼ」

「よし、手始めにデスボー〇でも撃ってみるか」

「・・・先ほどから何を物騒なことを言っている？」

エヴァがようやくライルたちの恐ろしい会話に気がついたようだ。

「イイジャーネーカデスボー〇。私ノ戦闘力ハ53万デスツテカ？」

「そんなものを放ったら地球が終わってしまうだろうが！」

「なら元氣〇か？でも元氣集められないから全部自前になるだろう

が」

「ええい！もっと威力を抑えろ！というよりもその漫画は基本やバ  
い技しかないからやめろ！」

仕方がない、とライルは今まで呼んだ漫画の必殺技を思い浮かべる。

「ならばドル〇ーラなんてどうだ？」

「それも国単位で吹っ飛ぶだろうが！」

「ソレモダメナノカ？カッコイイノニヨー」

その後もライルとチャチャゼロが提案する必殺技は全て却下され、  
結局必殺技を決めることはできなかった。

## 18話 魔皇様 主人公なら持っている？（後書き）

必殺技とか考えるの難しくないですか？

よく皆さん考え付くなーなんて少し尊敬します。

主人公には決め台詞と必殺技。これがあると燃える！

ってのが私は思うのですが、いざ自分で考えるととたんに思いつかなくなります。

やっぱり才能なんですかね？

## 19話 魔皇様 なに？俺は子供料金だと？！

GWのある日、俺はあやかの別荘から帰ってきて暇になった休日をどのように潰すか考えていた。

そんなときTVの特番が目に入った。

「ネズミの王国に行きたい」

「いきなり何を言い出すんだ」

俺の一言に呆れかえるエヴァ、この話ほとんどの出だしがこんな感じなのだが良いのだろうか。

まあ大丈夫か。

「夢の国だぞ？ファンタジーだぞ？行きたくならないか？」

「ファンタジーって・・・お前の存在そのものがファンタジーだろうが。それに700歳になってまで遊園地に行きたいなどと言い出すのはどうなんだ？」

くっ、コイツ予想以上にノリが悪い・・・

京都だったら二つ返事で同意するくせに。

「ですがマスター、ライルさんは遊園地に行ったことが無いのではないのでしょうか？」



「私も言ったことはないが行きたいとは思わんな。第一人が多いではないか、なぜ遊びに行つてまで行列に並ばねばならんだ」

「むう、確かに人が多いのは面倒だな。だが一度は行ってみるべきだろう」

「面倒くさい。行きたいのであればお前一人で行けばいいだろうが」

エヴァは本当に面倒くさそうに手を振って話を打ち切る。

ロリっ子のくせに生意気な。

茶々丸を誘おうにも流石に小さな子供を1人家に残していくのは忍びないので俺は一人で出かけることにした。

「おや？ ライル殿ではござらんか」

駅へと歩いて向かっていると後ろから声をかけられる。

「楓か、そうだお前今暇か？」

「用という用はないでござるが、今風香と史伽のおもりをしているところで・・・」

「あー、ライルだ！」

「何してるの？」

大きな声を出して近寄ってくる鳴滝姉妹。この2人を連れて歩くの

はおもりという表現がぴったりだな。

「ふむ、暇なのでな今からどこかに行こうかと楓を誘っていたところなのだ」

「おー、デート！」

「いいなあ、私もデートしたい」

きやつきゃきやつきゃとはしゃぐ双子、全く子どもだな。

やれやれとため息をついているライルだが、傍から見たら大人の女性と子どもが3人という構図に見える。

「ふむ、ライル殿2人も連れて行っても構わんでござるか？」

うーむ、この2人を連れていくと騒がしそうだが仕方あるまい。

「良いぞ、では駅へと向かうか」

「ライル、ハーレムだね！両手に華どころじゃないよ」

「はっ、ちびっ子には興味はない」

「むー、ライルもちびっ子なのに」

わいわいと騒がしくしながらも歩みは止めず、駅へとついた。

「ところでライル殿、行先は決まっているのでござるか？」

「うむ、今日の特番を見ていたらネズミの王国に行きたくなつてな。ああ金は俺が出すから心配するな」

「おお太っ腹だね」

そんな感じでネズミの王国に到着

やはりGWということもあって人が多い。ここでぐずぐずしても仕方が無いので俺たちは行列に並んで入場券を買うことにした。

「12～17歳を4枚」

「はい12～17歳を4ま・あの～後ろの方は本当に17歳ですか？あと君たち3人は11歳以下じゃないのかな？」

受付のお姉さんが非常に困惑したような顔で訊ねてくる。

「拙者はこう見えても中学生でござる」

「（・・・拙者？ござる？）済みませんが学生証の提示をお願いします」

「む、俺は持ってきてないぞ」

「僕もー」

「私もー」

「学生証でござる」

「あ、ハイ。確かに中学生ですね。（最近の子は発育いいのね・・・、それに目の前の女の子は男の子みたいな格好と喋り方だし）では1歳以下を3枚と12～17歳を1枚です。楽しんでくださいね」

俺たちが全員同じ学年だと言うことは信じてもらえず、俺たちは子供料金で入場することとなった。

まあ、俺は本当なら学生料金ではなくシニアなんだけどな。

「むう、3人は良いでござるな」

「えへへ、いいでしょ」

「だが、中学生にもなって子供に間違われるってのはどうなんだ？」

「それはそれ、これはこれだよ」

そんなこんなで俺たちはネズミの王国を楽しんだ。

どこもかしこも何時間待ちとなっていたがまあそこはご愛敬というものだろう。

日が暮れ出したので俺たちは王国からでて麻帆良へと帰ってきた。

「あー楽しかった。帰ったら皆に自慢しよー」

鳴滝姉妹は頭にネズミの耳をつけ、両手にお土産を持ちご機嫌な様子である。

自慢するのはいいが、非常に面倒なことになりそうだ。

「ではライル殿、拙者たちはこれで。今日は楽しかったでござる」

「じゃーねー」

「またね」

別れのあいさつを済ませると俺は家へと帰った。

居間へと入るとエヴァが不機嫌そうな様子でこちらを見る。

「む、遅かったではないか。まさか本当に1人で遊園地に行ったのか？」

「初めはそのつもりだったが、楓と鳴滝姉妹とあってな一緒に行ってきた」

「なにい！それは一体どういうことだ！なぜ私とではなくその3人と一緒にいくのだ！？」

何こいつ、面倒くさい。

「お帰りなさいライルさん」

「おう、ただいま。これお土産」

俺は手に持っていた荷物を茶々丸に渡す。

「おい！ライル説明しろ！」

「ところで今日の晩飯はなんだ？」

「今日は魚が安かったので焼き魚にしてみました」

「ふむ、そうか」

俺は手を洗い、食卓に座って料理が出てくるのを待つ。

「ライル！私を無視するな！」

ロリが俺の周りで腕を引っ張ったり、足をはたいたりして騒いでいるが食事が終わるまで無視することにした。

今日も茶々丸の飯は旨い。

**19話 魔皇様 なに？俺は子供料金だと？！（後書き）**

忘れかけていた楓とのデート。

プラスアルファがついてきていますが、まあこんなのもアリなのではないでしょうか。

・・というよりもデートらしい描写なくね？

## 20話 魔皇様 スコップマン!

またもとある休日の事、このところ何かと忙しくドタバタとしていたため朝からこんなにもゆったりしているのは久しぶりだ。

朝食を済ませると、何をしようか考えた。

このままだらだらしても良いし、天気がいいのだからどこかに出かけるのも良いかもしれない。

あれこれ頭に浮かんだが、そういえば気になって買った本を積み上げてばかりだったことを思い出す。

今日はその本を読むことにしよう。

そう思って部屋に戻ろうとした時

「おい、ライル。暇だから相手をしてくれ」

相も変わらず空気の読めない発言をする金髪の少女。そうエヴァンジェリンだ。

夏も近づいていて気温も高いせいか少女はソファの上で手足を投げ出しにぐたつとした状態だった。

あれがもつと大人の女だったら非常に見応えがあるのだが・・・現実  
は残酷である。

「相手をしろって言っても何をすればいいんだ？」



俺としては本を今すぐにも読みに行きたい。しかしこの少女は相手をしなかったら直ぐに機嫌を損ね、結局ゆっくりと読書が出来ないことは目に見えているのだ。

つまり少しだけ相手をしてさっさと部屋に戻るのがベストである。

「うーん、じゃあ何か面白い話をしてくれ」

いきなり面白い話をしろ、と言われてすぐさま実行できる人間がどれだけいるだろうか。無茶ぶりにも程がある。

だがここで引き下がってはいけない。それはつまり敗北と何ら変わらないからだ。

暑さのせいで俺も頭が茹っているのか思考が変なことになっているが、今の俺にはわからないことだ。

「仕方ない。では『闇夜のスコップマン』という話をしてやろう」

「なんだそれ？ 題名からして全然面白くなさそうなんだが・・・頼んだのは私だしな」

そういうとエヴァはよっこいしょ、という掛け声とともに起き上がりソファに座り直す。

近くにある人形を抱くと、静かにこちらを見たことからどうやら聞く準備が整ったらしい。

「では、話をしようか」

『とある新月の夜、寂しい通りを一人の男が歩いていた。その男は顔が赤く足取りもふらふらしていることから酔っ払っていることがわかる。

ふらふらふらと覚束ない足取りで道を歩いていると右手側に開けた場所が広がっていた。

そこには最近まで何かが建っていたような気がするのだが思い出せない。男は酔っているせいで自分の記憶力が怪しくなったわけではない、と誰に聞かれたわけでもないのに言い訳をしている。

馬鹿馬鹿しい、ため息をいて男は再び歩き始めようとすると、その空き地からザク、ザク、という音がきこえてくる。

こんな夜遅くに一体何の音だ？男は歩き出そうとした足を止め耳をすませる。ザク、ザク。音は絶えることなく響き続ける。男は気味が悪いと思いながらも酔いが回っているせいか気が大きくなっている。

普段であれば決して近づこうとしないだろうが、この日の男は興味本位で音のする方へと近づいて行く。

ザク、ザク。音はどんどん大きくなり、そしてついに音の原因を突き止める。

そこにいたのは、スコップを持ってひたすら穴を掘り続ける男だった。あまりに平凡な結末に男は拍子抜けした様子でボーっと突っ立っている。

だが、なぜこの男はこんな時間に穴を掘っているのだろうか。よく考えてみれば全くもって不自然極まりない。

男は意を決してその穴を掘っている男へと声をかけた。

おい、そこのお前。一体何をしているのだ？

声をかけても反応は帰ってこず、ひたすら穴を掘り続けている。聞こえなかったのかと思い男は先ほどよりも大きな声で再度声をかけた。

おい、お前一体何をしているんだ。

すると声が届いたのか穴を掘る手を止めこちらへとゆっくりと振り返る。

何をしているかだと？見ればわかるだろう、穴を掘っているんだよ。

変なことを聞く奴だと言わんばかりの態度を取る穴を掘っていた男。それは男も見ればわかる、聞きたいのはそう言うことではないのだ。

そこで男は質問を変えた。

では、何故こんな時間に穴を掘っているのだ？

そう訊ねると男は怪しく笑ってこう答えた。『』

「ライルさん、あの千雨さんがお見えになってます」

ん？そういえば、今日は千雨の修行を見ることになっていたんだか？

「すまん、エヴァ用事が出来た」

俺はそう言って座っていた椅子から立ち上がった。

「おい！待てそんな中途半端なところで区切ったらもやもやするだろうが！」

「悪いな」

俺はそう言って部屋から出て行った。

ライルはこちらを振り返ることなく部屋から出て行った。くそ、気になる。大して面白い話でもなさそうなのに気になって仕方がない。

一体穴を掘っていた男は何と言ったのだろうか。

何かを埋めるため？死体か？それとも宝物か？

腕を組んで頭を捻るが、満足いく答えは見つからない。

「マスター先ほどからどうされたのですか？」

家事を一通り終えた不思議そうな顔をして茶々丸が訊ねてくる。とはいっても表情はいつもの無表情なのだが、なんとなくそう見える

ということだ。

「ああ、さっきまでライルから聞いていた話の結末が気になって仕方無くてな」

「はあ、どういいうお話でしょうか？」

「ん？ええつとたしか『夜のスコップ男』だったか？」

初めに聞いたタイトルは全然おもしろくなさそうなものだと言うことは覚えているのだが・・

「ああ、『闇夜のスコップマン』ですね」

「おお、そうそうそれだ！茶々丸は知っているのか？」

「先ほど検索をかけた結果かなり有名な話であるとのことですよーむ、なるほど。そんなに有名な話だったのか、知らなかったな。

ん？ということは茶々丸に聞けばオチがわかるということか！

「なあ、茶々丸。出来ればそのオチを教えてくださいませんか？」

「わかりました。では、『とある新月の夜・・』」

「待て待て、それはさっき聞いたからオチだけで良いんだ！」

慌てて私は茶々丸を止めに入る。

だが茶々丸は首をかしげてこう言った。

「ですが、この話は最初から聞かないと面白さが無くなってしまいますよ？」

「むむ、それは本当か？それは困るな・仕方がない。初めから頼む」

「はい。それでは、『とある新月の夜、寂しい通りを一人の男が歩いていました。その男は顔が赤く足取りもふらふらしていることから酔っ払っていることがわかります。』

ふらふらふらふらと覚束ない足取りで道を歩いていると右手側に開けた場所が広がっていました。

そこには最近まで何かが建っていたような気がするのですが思い出せません。それが恥ずかしいのか男は酔っているせいで自分の記憶力が怪しくなったわけではない、と誰に聞かれたわけでもないのに言い訳をしています。

そのことに考えが至ると、馬鹿馬鹿しい、ため息をいて男は再び歩き始めようとしますが、その空き地からザク、ザク、という音が聞こえてきます。

こんな夜遅くに一体何の音だろう？男は歩き出そうとした足を止め耳をすませると、ザク、ザク。と音は絶えることなく響き続けてきていました。

男は気味が悪いと思いながらも酔いも回っているせいか気が大きくなっていました。

普段であれば決して近づこうとしないでしょうが、この日の男は興味本位で音のする方へと近づいて行きます。

ザク、ザク。音はどんどん大きくなり、そしてついに音の原因を突き止めます。

そこにいたのは、スコップを持ってひたすら穴を掘り続ける男でした。あまりに平凡な結末に男は拍子抜けした様子でボーっと突っ立っていると、ふと疑問が湧いてきます。

なぜこの男はこんな時間に穴を掘っているのでしょうか、と。よく考えてみれば全くもって不自然極まりないのです。

男は意を決してその穴を掘っている男へと声をかけました。

おい、そこのお前。一体何をしているのだ？

声をかけても反応は帰ってこず、ひたすら穴を掘り続けます。聞こえなかったのかと思い男は先ほどよりも大きな声で再度声をかけました。

おい、お前一体何をしているんだ。

すると声が届いたのか穴を掘る手を止めこちらへとゆっくりと振り返ります。

何をしているかだど？見ればわかるだろう、穴を掘っているんだよ。変なことを聞く奴だと言わんばかりの態度を取る穴を掘っていた男。

それは男も見ればわかります、聞きたいのはそう言うことではないのです。

そこで男は質問を変えました。

では、何故こんな時間に穴を掘っているのだ？

そう訊ねると男は怪しく笑ってこう答えました。『」

すると茶々丸が不意に顔を上げる。

「どうした？茶々丸」

「そういえば今日はメンテナンスがありまして、そろそろ行かなければいけません」

どうやら時間を確認していたようだ。

茶々丸はエプロンを外すと部屋から出て行こうとする。

「おい！ちょっと待て！オチは！？オチはどうなったんだ！？」

「すみません急ぐのでその話は後で・・・」

結局茶々丸はオチを言わずに出て行ってしまった。

くっ、またしても同じところで話が終わってしまうとは・・・

私はイライラするのを抑えきれず頭をかきむしった。



だが考えたところで結末がわかることはない。

正直気になって仕方がないため何も手につかない。悶々としたまま私はソファの上でグダっていた。

しばらくすると、階段から下りてくる足音がする。

ライルの用事が終わったのか!?

私は部屋から出て階段を見に行くが、下りて来ていたのは千雨だった。

「なんだよ、人の顔を見てがっかりしたような顔するなよな」

「したようなではない、した顔だ。それよりもライルはどうしたんだ?」

「ん? ライルはまだ用事があるとか言って別荘の中にいるが」

なんだと・・・ではまだ私はこの悶々としたまま過ごさねばならないのか!?

そこでふと閃いた。もしかしたらコイツがさっきのオチを知っているかもしれない。

「なあ、千雨、お前『闇夜のスコープマン』って知ってるか?」

そう訊ねると、千雨はなるほどな、と呟いてにやりと笑った。

「知っているのか?! だったら結末を教えてください!」

「はあ、しかたねえな。いいか、じゃあ話すぞ？」

私はごくりと生唾を飲み込んだ。ああ、ようやく結末がわかるのか！  
そう考えると何故か鼓動が激しくなる。求めていたものが今にも手に入りそうな興奮とでもいえいいのだろうか。

「『とある新月の夜のこと・・・』」

千雨が先ほどの話をし始める。正直その部分はもう聞き飽きたのだが、先ほど茶々丸に言われたことを思い出し喉から出かかった言葉を飲み込んだ。

「『そこで男は質問を変えた。

では何故こんな時間に穴を掘っているのか？と。

すると穴を掘っていた男は合点がいったようで、にやりと怪しい笑みを浮かべるとこう答えた

『・・・ってヤバイもう寮に戻んなきゃいけない時間じゃねえか！  
？』

その言葉に思わず私はずっこけそうになる。

「待て待て、そんなのはどうでもいいから早くオチを！オチを教えてください！」

「悪い、エヴァンジェリン！また今度な！」

その言葉を残して千雨はさっさと帰って行ってしまった。

何故だ・・・なぜいつもそこで話が途切れるんだ！！

私は結局茶々丸が帰ってくるまでの間悶々とした時間を過ごす羽目となった。

## 20話 魔皇様 スコップマン！（後書き）

という訳で闇夜のスコップマンでした。

まあ、古畑任三郎のパロミたいな感じですかねー。

## 21話 魔皇様 喉が渴いた

不意に喉の渴きを覚えた。茶々丸に何かを頼もうかと思ったが、先ほど買い物に出かけると言って出て行ったばかりであることを思い出す。

目の前でソファにふんぞり返ってゲームをしているエヴァに頼んだところで持って来てはくれないだろう。

ライルはそこまで考えて結局自分で飲み物を取りに行くことにした。台所まで行くと冷蔵庫を開けて中を見る。しかし困ったことに丁度いいものがなかった。

それもそのはず、いつもは茶々丸が紅茶か珈琲を入れてくれるのだから缶コーヒーやペットボトルに入った紅茶なんてものは冷蔵庫に入っているわけがないのだ。ジュースも言わずもがなである。

とりあえず冷蔵庫の扉を閉めるとしばし黙考する。

茶々丸が帰ってくるまで待つか・いや、先ほども言ったように茶々丸は先ほど出かけて行ったばかりなのだ。今からだとどれだけ早くても2時間はかかる。

では、自分で紅茶を淹れるか？

それもまた現実的ではない。なにしろライルは自ら紅茶を淹れたことがないからだ。何かで調べながら紅茶を入れることは可能だ。しかし自ら入れて茶々丸と同じような味が出せるはずもない。出来あいのものでは納得出来るが、自分でいれたものであれば別だ。

うーむ・・・どうするべきか。

ライルは真剣に頭を悩ませていた。むしろ途方に暮れていると言う方が正しいかもしれない。ライルにとってこの問題は他のどんなものよりも難しいものであった。

うー、と小さく唸りながらライルは頭を掻く。ロリコンがみれば間違いない。吐血ものの仕草に違いない。

しばらく唸り続けて、ライルは外に飲み物を買に行こうかと考えた。

だが、ライルは心の中で否定した。それはそれで何か負けたような気がしてならなかったからだ。

一体何に負けたのかと言われるとライル自身答えることは出来ないだろう。しかしそれでもライルは負けたと思うのだ。自らが負けだと認めることを行動に移すことは出来ない。

では、ここは妥協して水道水を飲むか？

いやはやそれもあり得ない。ライルは今水を飲む気分ではなかったのだ。喉が渴いているのに気分も何もないような気もするが、やはり水を飲む気はなかった。

ライルは再び考えこむ。

ああするか？ いやいやそれとも・・・

「あの、どうされたんですか？」

ライルが頭を悩ませていると背後から声がかけられる。振り向くとそこにはじつとライルの事を見つめる茶々丸が立っていた。両手には買い物袋が下げられており、どうやら買い物を終えて帰ってきたところらしい。

「ふむ、少し喉が渴いてな。紅茶を淹れてもらえるか？」

「はい、判りました。では少々お待ちください」

わかった、と応えようとライルはリビングへと戻ってどっかりとソファへと座り込み、軽くため息をついた。喉が渴いて仕方がないが、もう少しすれば紅茶が飲めると思うと待つ時間は苦にならなかった。

やはり、茶々丸は理想の嫁だな。不意に浮かんだその言葉をきっかけにライルは紅茶を待つ間の時間茶々丸の素晴らしさについて思考を始めたのである。

## 21話 魔皇様 喉が渴いた（後書き）

この話を要約すると・・・やっぱり茶々丸は最高ってことですね！

ええ間違いありません。（え

しかし久しぶりにこっちを更新しようと書き始め、終わってみると結果こんな感じになってしまいました。

まさにチラシの裏にでも書いてろってな話ですね。

たまには中身のない話でも良いじゃないか！

あつ、いつも中身はなかったか・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7920o/>

---

エヴァさん家の魔皇様

2011年2月17日21時57分発行